

第3章

「帯広の森」を支える市民運動と行政



第1節 市民活動

「帯広の森」出会いと思い出

帯広の森市民植樹祭実行委員会 最後の委員長 高橋 猛文

我が家は祖父の時代に岐阜県から十勝に入りました。家業として木材に関わることを生業としてきました。父の代に樹木の伐開製材だけでなく、地場で生産される木材を加工して家具建具を作るようになりました。明治から昭和の30年代までの建具はアルミ製品とか鋼製、樹脂の家具建具は無く、建物の窓・ドアなどの建具はすべて地場の木材で創られていた時代です。

私は東京での学生生活を終えて、帯広に戻り、父の家業を手伝うようになりました。

ちょうどその頃、帯広の森を創り始めた時代でした。私はその頃ローターアクトクラブに入っていました。市民植樹祭が始まる頃より市内の様々な団体が参加するようになり、ローターアクトクラブもその一員として参加するようになりました。帯広市教育委員会がこれからの街創りの主体となる小学生にも参加させたいと相談があり、市内の教育関係者、福祉団体、事業者団体などが一つになって「森の少年隊」を創ろうと云うことになりました。そして、その実務を担う団体として、ローターアクトクラブが担当することになりました。私も実務としてお手伝いをするうちにすっかり「森の少年隊」活動にのめり込む様になりました。

結局ローターアクトクラブを離れてからも、この活動のお手伝いをするようになりました。

曾祖父の時代の十勝は、原始の森を切り拓き畑地を創り、街を創ってきました。祖父、父の時代の十勝はようやく人・物が集まり急速に地域が出来、町が作られた時代です。木材の需要が増えた時代です。当時の建物は地域で生産される素材で作られていました。多分ひとが生きる原則である、衣食住のうち、衣の素材は本州から持ってきてても加工は地場です。食と住は地場の素材を加工し地場で消費し、生産された農産物は地域外へと移出され、十勝経済の骨幹となってきました。

その時代を忘れないために帯広の森は存在している。また新しい次代を創るためにも、帯広の森は存在していると思います。

帯広の森植樹祭実行委員会は長い間、郷土史家の棚瀬善一さんが委員長としてお務めされていましたが逝去されました後、私が委員長を務めさせていただきました、様々な方と交流をさせていただきました事は、私の人生にとりましても家業にとりましても有難いことでした。

最後に「森の少年隊」創立時より、一生懸命に少年隊の活動に取り組み、人生を掛けて森の少年隊活動を成し遂げた畠山茂さんのご冥福をお祈りし、私の「帯広の森」出会いと思い出と致します。



平成14年(第28回)市民植樹祭

元市民育樹祭実行委員長 林 光繁

帯広の森の植樹祭は1975（昭和50）年6月1日にスタート、昨年で50周年になった。第1回の実行委員長は父、林克己（元十勝毎日新聞社社長）が務め、その後、私が育樹祭の実行委員長を務めた経緯があるので、人ごとではない。

最後となった第15回育樹祭でさらなる森の成長を願い、作業を行った参加者（2005年10月16日撮影）以来、植樹祭は30回の2004年で終了、延べ14万8000人が参加、約23万本の木が植えられた。木の成長と共に管理が必要となり、1991年から育樹祭を開き、間伐、枝払いを展開したが、2005年に終了、現在は森づくり協議会（磯野照弘会長）が見守っている。



最後となった第15回育樹祭でさらなる森の成長を願い、作業を行った参加者
（2005年10月16日撮影）

結果的には、十分な管理が行われず、中心施設の「帯広の森はぐくむ」周辺が市民の憩いの場となり、公園の機能を果たしているに過ぎない。文字通り「帯広の森」であり、「公園」とは言えない状態。住民や観光客に「帯広の公園はどこ」と問い掛けても、「緑ヶ丘公園」「すずらん公園」と返ってくるだけだ。

吉村博元帯広市長が、「近代的田園都市」をまちづくりの目標に掲げ、オーストリアの「ウィーンの森」に触発されて1970年にスタートした帯広の森構想。当初の志は着手、終了したが、吉村市長は「ウィーンの森のように、市民が利用し、親しむ場であり、誇りとする公園をイメージした」と思うので、私はまだ「完成していない」と思う。

世界的には国民が誇りとする公園が数多くある。その代表例として、私が見たことのあるボストンと

トロントにある通称「エメラルドネックレス」と言われる公園を挙げたい。両市の公園は、中心市街を「ネックレス」のようにぐりりと囲んでいる。市民は東西南北どこへ向かってでも公園に突き当たり、季節ごとの花、動き回るリスを見ながらベンチに腰掛け、くつろげる。

ボストンのガーデンは有名な野外演奏会が開かれる「ボストンコモン」だけではない。西側には1837年パブリック・ガーデンが造られ、コモンウェルス・アベニュー、リバーウェイ、オルムステッド・パーク、ジャマイカ・ポンド、フランクリン・パークと、つながり、「エメラルド・ネックレス」を構成している。中には、初代大統領・ジョージ・ワシントン像、つり橋、花壇、遊歩道、噴水等の施設が切れ目なく存在している。

カナダのトロントもボストンに劣らず美しいガーデンが、マチを取り囲む。ボストンとの違いは、マチに隣接して北米五大湖の一つ、オンタリオ湖があることだ。

ゲージ・パーク、ジャック・ダーリン・メモリアル・パーク、ヴィクトリア・パーク、リバーサイド・パーク、レークフロント、プロムナード・パーク、ウォータールー・パーク、ライオンズ・バレー・パーク…29箇所の公園が連なり、ネックレスを成立させている。

どの公園にも人があふれ、子供たちの声が聞こえてくる。野球場、サッカー場、テニス・コート等スポーツ施設も公園内外にあるので、活気にあふれている。

自治体が公園をマチの最重要施設として市民の憩いの場に必要施設を建設して管理している。帯広の森は、掛け声だけで、十分な施設の建設も管理も行われていない。

不思議なことだ。これだけ緑が豊かで景観の良い場所を市当局が放置状態にしておくことは…。406ha超の場所を全部整備するのではなく、ボストンやトロントのように、多くの公園をネックレスのようにつないでいく計画を立てられないだろうか。何か所かの小公園を公費建設するか、場所を民間に提供して、名称に個人名をつけることを許す（期限付き）と、スポンサーする人も出てくるはずだ。

50年を機に、知恵を集めて「帯広の森」を、市民の憩いの場に作り変えてもらいたい。

森の少年隊～ 40 年間の活動をふり返って～

畠山 八重子

昭和 52 年結成された当初、定員 40 名で隊員を募りましたが、応募数が上回り 58 名でのスタートとなりました。次の年には新たな隊員 56 名が加わり 114 名となりスタッフを加え、貸切バス 3 台で移動していたことを思い出します。

この 50 人を超える新隊員はこの 2 年だけ、その後は新隊員 45 名が最高で、年々減少を続け昭和 63 年(活動から 12 年)には総隊員数が過去最低の 26 名になってしまいました。

この頃に事務局長の畠山茂(私の主人)が十勝毎日新聞の取材を受けた記事がありました。

——会員減についてはスポーツ少年団、さらにはファミコンといった外的要因を中心に考えていましたが、それがすべてではなかった。指導態勢にも甘さがありました。指導員はすべてボランティアのため、責任の所在がはっきりしていないということもあり、内容が今一歩でした。数年前にこうした欠点に気づき、現在は活動内容をより楽しく、テーマのしっかりしたものにしていくと見直しを図っているところ です。

主な活動は、緑のボランティアと集団生活で従来と変わりませんが、内容に楽しむという要素をもっと盛り込んでいきたい。自然の中でもっと遊ばせてやる——ということをさらに追求していきたい。現在、子どもたちは親元を離れて年間 8 泊するわけですが、これは貴重な体験になります。一つ一つの行事を徹底して見直し、マンネリにならぬよう努力したい。現在、隊員数は減りましたが、全員の顔と名前が一致し、行事への出席率も上がりました。このぐらいの人数が活動していく上では適度なものと感じています。(平成元年 3 月 23 日掲載)——と今後の意気込みを語っていました。

その後、隊員数が増えた年もありましたが少子化もあってか、だんだん減少が目立つようになり、行事等にも困難が生じるようになってきました。

このころから森の少年隊の将来を考えるようになりましたが、森の少年隊をこよなく愛してきた主人は「入隊したいという子どもがいる限り続けたい」と頑張って活動を続けてきました。しかし、隊員の減少、後継者不足、主人自身の体調不良などから、

結成 40 年目を迎える平成 28 年度をもって森の少年隊の活動を終了すると決心しました。

人生の半分以上を森の少年隊と過ごした主人にとっては、健康であればまだまだ続けたかったのだと思います。森の少年隊をやめたその年の 8 月に体調を崩し入院。退院後の自宅療養では時折「今日少年隊か? おにぎり握らなきゃ」が目覚めの第一声。「また少年隊の夢見てた」主人の原動力は森の少年隊だったのだと実感。

本来であればこの「帯広の森 50 周年記念誌」の原稿も主人が引き受けるところではありますが、令和 4 年 9 月に他界。私が代わってエピソードなどを書かせていただきます。

家族みんなでボランティア

森の少年隊は民間ボランティアのため、活動費用は隊費、助成金や補助金、寄付金などでまかなっていました。

隊費は 1 ヶ月 1,000 円。これは主人のこだわりでもあり 40 年間変わることはありませんでした。そのため助成金や補助金の申請・報告書作りを右手人差し指 1 本で、キツツキのようにパソコンを使い奮闘していた姿を思い出します。

活動日数が年間 24 日とはいえ、年間行事が決まるとバスの手配、施設会場の申し込みに始まり行事の事前準備、キャンプなど大きな行事の片付け、事務的なことなどを含めるとかなりの日数になりますが、子供たちの生き生きとした楽しそうな笑顔が励みになっていました。

私たちの姿を見て育った娘も準備の手伝いやアイデアを出してくれたりと戦力の一人でした。もう一人の戦力は同居している私の母です。ボケ防止にと行事案内の封筒のあて名書き、日中の出欠連絡の電話番号を自分から進んでやってくれました。

そして、もちろん行事当日は、ジュニアリーダー、リーダー、指導員が何よりも大きな戦力でした。

新聞記事に主人のこんな言葉が載っていました。——森の少年隊では、学校では得られない、大人を含めた異年齢との交流、他校の子供との交流、野外活動で土や草のにおいを体験すること、それらすべてが子供にとっては貴重なものになっているはずです。卒隊後もジュニアリーダー(中学生)、リーダー(高校生)、指導員として活動にかかわりを持っている子供も多い。将来的には彼らが私の後継者として

隊の活動を支えていってくれるものと期待しています。】ですが、残念ながら後継者のめども立たず終了することになってしまいました。

隊員経験者の指導員であっても、行事だけでなく色々な作業までとなると仕事との両立は難しく、後継者のなり手がいなかったのと同時に後継者を育て、作り上げる事が出来ず責任を感じています。

主人にすれば、まだ自分は頑張れる。後継者はもう少し先のことと思っていたのかもしれませんが。

『自然の大切さを楽しく学ぶ』

森の少年隊の目的と4つの柱

- ①自然観察を通じて、身近な自然を知る
- ②植樹や育樹、桜並木の造成・清掃など緑化活動を行う
- ③自然と触れ合うことで、自然からの恩恵と大切さを学ぶ
- ④宿泊やキャンプ等の共同生活体験により仲間との絆を高める

この『自然の大切さを楽しく学ぶ』という目的は指導員研修の中で、KJ法（カードや付箋を使って情報を整理し、問題解決や新たなアイデアの創出に役立てる手法）を使い時間をかけ、森の少年隊が発隊して手探りで始まった指導体制も15年近くたってやっと目的が明確になりました。

隊員は、自然を知り、緑を育て、自然と触れ合い、共同生活体験を繰り返しながら自然のやさしさや大切さを感じ、仲間たちとの絆を高めている。このことは将来、地球を愛し、民族や隣人を愛する心や生命の大切さに必ずつながっていくものと信じ指導にあたっていました。

その指導をしている我々は社会教育をしているのだと自負していた主人でした。

今まで森の少年隊では数々の表彰を受けてきましたが、平成25年に国土緑化推進機構から「緑の少年団育成成功労賞」を森の少年隊指導委員会がいただくことができ長年続けてきた甲斐がありました。

森の少年隊の指導員は、卒隊生などで構成される指導委員会（中学生・高校生・大学生・社会人）が隊員の主体性を促す指導や安全で円滑的な運営を行って来ました。

中学生（ジュニアリーダー）、高校生（リーダー）は先輩リーダーや指導員の隊員への関りや指導を見

ながら、憧れの気持ちを持ち見て聞いて学んでいました。

長年指導員をしていると隊員との年齢の差は大きくなり、体力的にも厳しさを感じることもしばしば。そんな時、若い力には本当に助けられ、ありがたい存在でした。

入隊は一生に一度

入隊は、新年度小学校5年生になる児童が対象で3月に説明会、受付を行い入隊を決定し途中からの入隊はできず、隊員期間は小学校卒業までの2年間。

説明会には親子で来る場合が多いのですが、友だち数名での参加もありました。



平成28年森の少年隊入隊式

説明会の中で主人は「森の少年隊に入隊するには一生に一度のこの時しかありません。止めるのはいつでも自由です。つまり入り口は狭く、出口は広いんです」そう言って、心配であれば最終的には4月に行われる最初の行事、新・旧隊員の顔合わせの合同宿泊行事に参加して決めても良いことを伝えていました。

親御さんは入隊を望んでいるが子どもの気が進まない。集合場所までの送迎が難しい。また、性格、病気、家庭の事情など心配なことに対しては本人の気持ちを優先し、親御さんとよく話し合い入隊を決め、入隊してからでも安心して参加できるよう情報交換を続けていきました。

また、指導員の多くが隊員経験者のため年齢も近く隊員の気持ちを理解でき話しやすい存在であることが安心につながっていたようでした。

隊員は、同世代の友だちだけでなく、様々な世代の人と交流し繋がりを作ることができるのも一つの魅力だったようです。

時代遅れのキャンプ

森の少年隊のキャンプは、隊員・指導員を含めて班編成をし、自分たちでテントを建て、火起こしをし薪を燃やし飯盒でご飯を炊く。食事作りはもちろん準備から片付けまで班ごとに役割分担を決めて行っていました。「この便利な時代に薪でご飯を炊くの？すべて手作り？時代遅れのキャンプをしているね」と言われたことがありました。経験・体験から学ぶ大切さを知ってもらうためあえて便利ではない少し大変さを感じるキャンプを行ってきました。

軍手をはいているから大丈夫と思ったのか、軍手で直接火のついた薪に触れて熱いと気づく。煙で目が痛いとしねの来ない方へ移動すれば良いことを知る。

飯盒を焦がしてしまうときれいにするまでに時間がかかり、自由時間が無くなる。そうすると次からは焦がさないように気を付け真剣に取り組む。上手く炊けると達成感を味わうことができ、チームワークがますます良くなり、誰かがやってくれるではなく自分がやるに変わってくる。

このように体験があるからこそ失敗、成功を繰り返しながら学習し学ぶことができます。体験がなければ学ぶ機会もありません。便利さばかりを追求するのではなく、不便さや大変さを感じながら考え体験し乗り越えていくことが、自分の力になり、生きていく力になると信じて行ってきました。

3泊4日のキャンプでは2日目の夕食と3日目の朝食の献立を班ごとに考え決められた金額で買出しに行き、自分たちで作るのですが、餃子を作るのに皮から手作りには驚きました。

——ある班とのやり取り

「この班は何作るの？」

「手巻き寿司！」

「手の上にご飯とネタ乗せて巻くんだね」

「違うよ。海苔に巻くんだよ」

「大事な海苔買ってたっけ？」

「えっ！あ～忘れた～。どうする？」

予備であった海苔を渡してあげるとみんなで頭を下げて「ありがとうございます」ホッとしていたようでした。手巻きは生ものではなく、チーズやウィンナーなどよく考えられていました。

冷やし中華を作った9人の班、ストレートのたれ

小瓶1本のみ。絶対足りない量に「大丈夫！」と返答。夕食が終わり「たれ、どうだった？」と聞くと「ピッタリだった！」とみんなが同じ返答。

自分たちの力で協力して作ったものは、どんなものであっても最高なのでしょうね。私から見たら最高の仲間の姿だなあと思いました。

キャンプといえば、忘れられない市役所と合同で行った100人を超えるキャンプ。定員を超える応募に主人が「全員受け入れよう」この一言に市役所の方たちはホッとしたようでした。岩内自然の村で森の少年隊が前泊し2日目から合流で行いました。

市役所の職員の皆さんにも指導員になってもらい2泊3日のキャンプが無事終了した時は、ガッツポーズでやったー！って感じでした。

豚汁に使うごぼうのさがき、やってもやっても終わりが見えなかったこと、雨の中で遊ぶ子どもたちをびしょ濡れになりながら写真を撮っていた市役所職員のこと、バンガローが暑すぎて体育館で寝たこと、今でも鮮明に思い出されます。

楽しく学ぶ

隊員の一番人気の行事は宿泊です。宿泊行事を増やしてほしいと言われるほどでした。宿泊での楽しさは、友だちと一緒に入浴や夜遅くまでのおしゃべりのようです。

児童会館での宿泊は午後10時就寝。男子は午後11時の見回りには寝ている子が多いのですが、女子は廊下までベチャクチャ聞こえているのにドアを開けるとピタッと話し声が止まってしまう。寝たふりが上手ですが「明日、起床時間守ってね」と声をかけると「は～い」と返事。寝てないのバレバレ。

ジュニアリーダー、リーダーも同じ部屋に宿泊しているので見回りの度に「寝るよ」と声をかけ大目に見ていました。

日高少年自然の家での3泊4日では、日中の活動量が多く、朝も早いため2泊目からは就寝時間になるとほとんどの子が眠りについていました。

行事の中では、作業的なものは出席率もあまり良くなかったため、午前中に作業を行い午後からは楽しいことを取り入れるようにしました。

暑い日の桜並木のゴミ拾いには、主人がポケットマネーでアイスの差し入れ。大喜びでした。

楽しく学ぶ、楽しく参加できるように、森の少年隊オリジナルの行事（ゲーム）を作りました。クイ

ズ番組を見ては「これ使えないかな？」とアレンジして取り入れていました。

○植物クイズ教室（主人が撮影した野草の花の写真を使った神経衰弱などで名前を調べる）

○森の少年隊トライアスロン（グループの知力・体力・時の運でチームゲームを競う）

○ミステリークイズ（クイズを楽しみながらチャンピオンを決定）

思い出が次々と

○緑の羽根募金活動の際4月の末だというのに寒くて寒くてホッカイロを買いに走ったこと

○4月29日はぐくーむで入隊式をしている時に屋根からドドーと雪が落ちてきて驚いたこと

○苗圃で採れたキノコで作ったキノコ汁がおいしかったこと

○自分たちが掛けた巣箱を調査していると突然モモンガが顔を出し、隊員たちは大喜び。それからというものの巣箱調査＝モモンガ探しに

○隊員が少なくなってきたからの植樹祭では、他の団体が昼食を食べているのを横目で見ながら指導員も必死で植樹したこと

○苗圃で必ずこのカシワの木は1期生が植えたものと自慢げに子供たちに伝えていたこと。でも子供たちの楽しみはリンゴや梨、栗を拾うこと

○はぐくーむのおまつりで豚汁を作ったこと

○子供たちが川で遊んでいる最高の写真を撮ろうとカメラを持った指導員が転んでしまい、人もカメラもずぶ濡れになってしまったこと…などなどたくさん。

幸せな出会い

40年間の隊員数は1,000人近くになります。

隊員経験者の心の中に森の少年隊での思い出が一つでも残っていてくれたら嬉しいです。

10歳で出会った子どもたちが社会人になり、キャンプなど大きな行事には東京からも参加してくれる森の少年隊大好き人間がたくさんいます。

私もこの森の少年隊に関われたこと、たくさんの子どもたち、優しく思いやりがある頼もしい人たちと出会うことができ幸せでした。

最後になりますが、森の少年隊活動30年目の主人の思いが詰まった新聞記事を見つけましたので一部を紹介したいと思います。

次世代への手紙

～森の担い手から100年後の子供たちへ～

自然の大切さと他人を思いやる優しい心。それは、言葉でいくら教えても身に付けられるものではありません。自然と触れ合い、自然からの恩恵を知り、緑を育て、共同生活の体験を培う中で学んでいくものです。

森を育てることは人を育てること。それは、次代の帯広のまちづくりにほかなりません。帯広の森は生命の大切さを教え続けてくれる「生きた学校」です。森の中で30年。子供たちを指導することで私が学んだ、君たちへのメッセージです。

（十勝毎日新聞 平成17年12月6日掲載）

森の少年隊40年間の活動にご支援・ご協力いただいた多くの関係者の皆様に心より深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



平成9年度(第23回)市民植樹祭 植樹宣言

帯広市 みどりの課

協議会概要

帯広の森・はぐくむの整備を契機に、市民協働の森づくりをさらに進めるため、平成21年度に「帯広の森づくり協議会」を設立した。同協議会は、森づくりに関わる市民、事業者及び帯広市で構成し、森の育成管理や利活用の方向性などについて、これまでに延べ72回開催した。（令和7年3月末現在）

設置目的

帯広の森の適切な育成管理及び利活用の促進を図るとともに、市民協働の森づくりを進めるため、森づくりに関わる市民、事業者及び帯広市が参加して、帯広の森の育成管理や利活用などの検討、意見交換、連絡調整を行うもの。

協議事項

- 帯広の森の育成管理に関する事
- 帯広の森の利活用に関する事
- 帯広の森・はぐくむの管理運営に関する事
- 帯広の森におけるボランティア活動に関する事
- その他帯広の森の森づくりの推進に必要な事項に関する事

設置年月日

平成21年9月1日

歴代会長 ※任期2年

平成21年9月～平成23年8月

畠山 茂（森の少年隊）

平成23年9月～令和6年1月

三日市 則昭（エゾリスの会）

令和6年2月～

磯野 照弘（森の回廊@十勝）

活動経過

これまで、年1～10回程度開催し、帯広の森・はぐくむの名称選考、帯広の森 森づくりガイドラインの作成、40周年記念ティーチ・インの開催、帯広の森築山（もりの山）の名称選考、帯広の森の育成管理に関する協議、50周年記念事業に関するもののほか、森づくり活動団体による活動発表会の実施、参考林地への視察研修を実施した。

（詳細はP96を参照）

構成団体

①帯広の森づくり活動を行うもの

○8団体

⇒各団体は、市民団体による帯広の森づくり活動の促進及び支援に関する要綱により帯広市から承認された内容に基づき、森づくり活動を実施している。（P97～112にて紹介）

②帯広の森に関する業務を受託しているもの

○株式会社ケイセイ（帯広の森指定管理者）

○帯広畜産大学（帯広の森植生調査受託）

③その他帯広の森づくりに関与が深いもの

○十勝造園緑化建設業協議会

○帯広クロスカントリースキークラブ

④帯広市都市環境部環境室みどりの課



H21.9.1 第1回帯広の森づくり協議会

開催年度	回数	内 容
H21	3	・（仮称）帯広の森市民活動センター名称選出、OP イベントについて ・施設見学（帯広の森・はぐくーむ）
H22	6	・森づくりに関する計画の見直しについて ・十勝飛行場周辺の今後の森づくりについて
H23	12	・第62回北海道植樹祭 in おびひろについて ・オオアワダチソウ駆除、防除について ・帯広の森苗圃エリアの利活用計画について
H24	12	・バス学習（前田一步園） ・帯広の森造成計画図と今の帯広の森を見比べる ・十勝飛行場周辺支障木伐採について ・帯広の森整備計画、林分台帳について
H25	9	・バス学習（九州大学演習林） ・帯広の森現地踏査（帯広川左岸：西24条南4丁目付近） ・築山周辺の園路整備について
H26	9	・バス学習（新田牧場、大正カシワ林、農高カシワ林、帯広の森 S59,61） ・森づくりガイドラインについて ・間伐材の利活用方法について ・パークゴルフ場の管理について
H27	5	・バス学習（十勝三股地区） ・森づくり協議会の方向性や活動内容について ・帯広の森づくりガイドラインの活用法について ・帯広の森築山について、名称選考
H28	3	・バス学習（東京大学北海道演習林） ・森づくり活動計画事前確認書による各活動団体との協議内容 ・帯広の森づくりにおける担い手の発掘と育成について ・帯広の森の育成と管理について
H29	4	・バス学習（前田一步園） ・帯広の森の理念の確認とワークショップ ・はぐくーむ連携事業、その他育成管理について
H30	3	・バス学習（石井山林） ・間伐の課題に関する今後の取組み、間伐計画（短期）について
R1	3	・バス学習（農高カシワ林、R1 間伐予定地、帯広の森サポーターの会活動区域） ・林分台帳、指定管理区域の拡大について
R2	-	（新型コロナウイルス感染症により開催なし）
R3	1	・今後の協議事項等について
R4	-	・帯広の森づくり勉強会（帯広の森の歴史を学ぶ、帯広の森植生調査からみる森の変化）
R5	1	・帯広の森づくり勉強会（特定外来生物（アレチウリ）について）
R6	1	・帯広の森づくり勉強会（帯広の森をつなぐもの） ・帯広の森の利活用について

森づくり活動団体 エゾリスの会

里山をつくろうプロジェクト企画・運営担当／
モニタリングサイト1000帯広の森サイト コーディネーター
伊藤 育子

楽しく集い、森を育む。

「まちで森と暮らす」を考え続ける・・・

設立年月日	1986年4月4日
代表者 (連絡先)	会長 三日市 則昭 0155-33-4223 Mail: info@ezorisunokai.jp
会員数	41名(2024年4月現在)

設立趣旨

エゾリスの会は、エゾリスをはじめとする野生の生きものたちとともに暮らし続けていくまちづくりを目指して1986年に発足した市民グループです。自然かんさつ会、生きもの調査、環境保全作業、まちづくりへの提言などを行っています。

活動内容

私たちと帯広の森との出会いは、1989年に帯広市から「帯広の森小動物生息環境調査^{*1}」を引き受けることになったことでした。



巣を探して数える調査中

エゾリスは冬を過ごすボール状の巣と休息に使う皿状の巣を使い分けています。

エゾリス・センサスで歩き始めた頃は、わずかに残されていた自然林の豊かさに心躍る一方で、植樹区では外国由来の草本に覆われた林床や間伐の遅れが目につき、外来種が多く植樹された景観は、計画されているはずの“ふるさとの森”からはほど遠く感じられました。

このまま調べるだけでなく、自然再生を私たち自身の手で！と意を決し1998年に『里山をつくろうプロジェクト』を立ち上げました。

「北海道ではあまり馴染みのない言葉ですが、里山は、燃料や堆肥の材料を集めたり、木材やホダ木を得たり、季節の味覚を楽しんだりする生活に密着した二次林で、人が関わることで自然の多様性を維持してきました。帯広の森ではふるさとの森づくりを目指していますが、自然と人の関わり方の手法については未だに方向性が見えていません。そこで、里山をつくろうプロジェクトではカシワ・ミズナラ林造成予定地で、市民の手による継続的な育林・自然復元作業を行いながら、自然とのつきあい方・楽しみ方を参加者自らが考えていくことを目指します。」

これは、活動立ち上げの企画書に書いたプロジェクトの趣旨（一部抜粋）です。間伐、実生苗の移植や林床植生の管理を行いながら、炭焼きや草木染め、雑草料理なども楽しんでいます。



伐倒後は手鋸で寄って集って枝払いするのがエゾリスの会の作法?!

私たちの作業では、面白い生きものを見つけるとよく作業が止まっちゃいます。でも誰も注意しません。それと、持ち寄りおやつの休憩は欠かせません。そんなふうに頑張らないで楽しんでいたら、気づけば四半世紀を過ぎて続いてきました。

2008年からは、帯広の森を『モニタリングサイト1000里地調査^{*2}』のコアサイトとすることをお引き受けして、植物相、鳥類、中・大型哺乳類、カエル類、チョウ類、人為的インパクト(相観植生)の調査も行っています。自分たちが環境管理に携わっている場所に暮らす生きものたちとずっと出会いたい、暮らしぶりをちょっと覗かせてね、そんな動機から続けていると、オオタカの巣立ちに立ち会ったり、タヌキやクロテンの訪問を発見するようなご褒美もあった

ります。植樹区にもオオバナノエンレイソウが芽生え、花が咲くようになって・・・翌年にはその先にも広がっているのを見つけた時にじわじわ来る嬉しさもたまりません！



子どもたちと一緒に植物相調査中

自然の森に様々な生きものが棲み分けているように、森の作業や調査にもいろいろな役割があります。高い技術や詳しい知識ばかりが必要なわけではありません。走るのが好きな人は捕虫網を振って調査で大活躍だし、名前は知らないけれど小さな生きものたちが何処にいたかを良く記憶している人がいるとうっかり刈り取っちゃうミスを防げたりします。抜き取った草を子どもたちが運び出してくれて木の上には草で子どもたちの巣が出来上がっていたりして。ちっちゃな子から後期高齢者まで、いろいろな人と一緒に森の生きものたちとの出会いを楽しみ、みんなで森の良き隣人となれるよう精進を続けられたら、嬉しい限りです。

里山をつくろうプロジェクトでは、ご近所の帯広農業高校のカシワ林^{※3}をお手本に、開拓以前の自然環境の復元を目指しています。崇高な目標の割に、「何をやっているんだ？」と叱られそうな呑気な作業ぶりです。しかし、自然相手には少しずつ、なるべくゆっくりが大事だと思っています。

エゾリス・センサスやモニ1000の調査結果に照らして、作業してきたことを振り返り、場合によっては作業内容を軌道修正する、を続けてきました。この繰り返しが順応的管理と言います。

私たちの実践をわかりやすく多くの人が理解できるものにしたいとの思いから、「森づくりガイドライン」の策定に参画し、自然度を計る指標となる林床植物のリストアップなどにも取り組んできました。

言うまでもなく、帯広の森は都市公園です。都市

公園は「都市にあって特定の用途によって占有されない空地を空地のまま（オープンスペースを）存続させることを目的に確保した緑地」です。十分なオープンスペースの存在が都市を暮らしやすく魅力的なものにしてくれます。

2015年、帯広の森は環境省より『生物多様性保全上重要な里地里山^{※4}』に選定されました。開拓史以降の新しい形の自然と人との共生の象徴として、地域の宝を次世代へ引き継ぐ取り組みに地域の外からも期待が寄せられています。

森の時間は人のそれよりもゆっくり進みます。私たちは、作業や調査で森に通い、豊かな森時間を過ごしながら森のこれからを考え続けています。“ふるさとの森”の育ちを今の中心メンバーたちは見届けられないでしょう。森の全てを今を生きる私たちが決めるなんておこがましい。森と向き合い森から学びながら、今より豊かにして子どもたちへ手渡したい。子どもたちもそのまた子どもたちへ手渡して行ってくれることを願って、私たちは今日も森へ出かけしています。



自然かんさつ会「帯広の森の川の中を歩こう！」

※1 エゾリス・センサスおよび動物相の調査を実施。

調査の成果はP51を参照して下さい。

※2 環境省の長期生態系観測（通称：モニ1000）

<https://www.nacsj.or.jp/activities/guardians/moni1000/site/areal/#hokkaido>

中・大型哺乳類調査は森の回廊@十勝の皆さんに分担いただいています。調査記録はP55を参照して下さい。

※3 北海道自然環境等保全条例に基づき環境緑地保護地区に指定された天然林

※4 https://www.env.go.jp/nature/satoyama/01_hokkaido/no1-1.html



設立年月日	1950年4月15日
代表者 (連絡先)	帯広みやま会会長 阿部 知行 0155-24-6153：日本森林林業振興会 札幌支部帯広支所内
会員数	99名(2024年4月1日現在)

設立趣旨

林野庁北海道森林管理局のうち十勝・釧路・根室管内の森林管理署等に在籍した経歴がある退職者及び同会の目的に賛同する企業をもって組織し、国有林退職者の福祉の向上と親睦を図り、林業の振興並びに愛林思想の普及を図ることを目的とする。

活動内容

当会のボランティア活動の一環として、一般財団法人日本森林林業振興会札幌支部帯広支所の公益事業活動「帯広の森」森づくり支援活動に協賛し、毎年6月に植樹・育樹作業を実施しています。



作業区域は、「はぐくむ」北側に隣接する約9haの区域で、「帯広の森」の入口として、春から秋には林内の散策や緑陰を求める方達の憩いの場として、冬には歩くスキーのコースとして利用されています。この区域では、森林の成長とともに林内に多くのエゾリスが生息し、鳥や獣の営巣も確認され自然豊かな森になりつつあります。



これまで、森林内の様子を見ながら、郷土種の広葉樹の育成、外来種の間伐、外来種実生苗の管理と散策路の管理（設定）を行ってきました。



活動当初は、当時植栽したチョウセンゴヨウマツ、シラカバ（外来種）、ニレ、イヌエンジュが成長し、林冠は鬱閉、林床の陽光が不足しており、下層植生が貧弱になっていました。

間伐作業が行われるまでは、イヌエンジュ、ヤチダモ、カシワ、ミズナラ、クルミ、サクラなどの稚樹や草本類も芽生えては消失していましたが、近年では陽光が林床に届くようになり、実生による稚樹の発生や下層植生の繁茂が見られるようになってきました。



これは、間伐の成果と言えると考えていますが、反面、林内が明るくなり、空間ができたことにより、セイタカアワダチソウ等とともに蔓やイチイの旺盛な芽生えと繁茂がみられ、蔓切りとイチイの間引き（伐採）にも力を入れています。



帯広の森のこれからについて

当会の帯広の森での活動理念である、広葉樹（郷土樹種）を主体とした樹林への遷移を促すとともに、散策路の整備などにより市民に親しまれる環境づくりを目指していきたいと考えています。

「生き物が豊かでみんなが楽しめる森を目指して」

設立年月日	2002年6月22日
代表者 (連絡先)	キャンベル・デイビット
会員数	11名

設立趣旨

帯広の森で森づくり活動をやりたいと仲間と話を始めていた頃、「2002年 全国雑木林会議とかち大会」の実行委員として参加してワークショップの開催などの貴重な経験をさせていただき、その後、帯広の森で活動を始めました。

街の近くにある日常の場所である帯広の森で森づくり活動をやってみたい。また、当時、間伐など手入れが十分ではない場所で「生き物が豊かでみんなが楽しめる森」を目指していくことにしました。

活動内容

○活動エリアの概要

活動エリアは十勝飛行場と帯広の森野球場の間で面積は約12haです。植樹年度は昭和51年から53年、平成3年、4年と初期に植えられた場所がメインで、主な構成樹種はトドマツ、アカエゾマツ、シラカバ、ケヤマハンノキなどで帯広の森になる前からのカラマツの防風林が入っています。

活動当初はトドマツ、アカエゾマツの間伐が不十分で真っ暗な森のイメージでした。また、活動開始後に、十勝飛行場近くのトドマツなどが航空法の高さ制限に抵触するとのことで、一部、皆伐されて林相が激変した時期、場所もありました。

○間伐と森に浸る散策路づくり

活動の初期はトドマツなどを間伐して林床を少し明るくするとともに、森の中を歩けるように間伐材をエッジにを使って散策路を作っていました。間伐の強弱、森の中にどうルートを引くか？面白いものは？どんな変化をつける？など考えて散策路をつく

るのは楽しい作業です。

伐倒作業ではほとんどの木が懸木になるため、安全の確保が大切になります。ロープや滑車を使えば引き倒す作業も参加者が一緒にやれる楽しい作業になります。

間伐によって少し明るくなると、林床の植生が豊かになりベニバナイチヤクソウの大きな群落が形成されたこともあります。また、散策路は年4、5回草刈りして、快適に歩けるようにしており、一般の方が歩いている姿を見かけると嬉しくなります。



○変化をつける草原、低木ゾーン

活動エリアには植樹した木がうまく育たなかった場所（ギャップ）があります。全て高木が育つ森にするより、所々に草原や低木による開けた場所がある方が、植物や昆虫など動物にも多様性をもたらすとともに、人にも明るさの変化を受けることを考え、ギャップは維持することにしました。

そうは言ってもギャップはツルウメモドキ、オオヨモギなどに覆いつくされていたり、オオアワダチソウが占有していたり、オニグルミがどんどん入ってきたりなど、なかなか厄介です。せっかくの草原、低木の場所にするので、エゾクガイソウ、ツリガネニンジン、エゾノヨロイグサ、ノリウツギ、ホザキシモツケなど在来種を実生で苗を育て少しずつ植えて、定着しつつあります。

目指す姿は一見、人の手が入ってないようでありながら豊かな植生や生き物がいる場所ですが、まだまだ、試行錯誤は続きそうです。

○間伐材の利用

活動を始めた頃は間伐材を散策路のエッジや案内看板、ベンチ、また、ワークショップ（WS）のクラフトなどに利用していましたが、最近では間伐材の量も増え、本格的な利用方法を検討する必要が出て

きました。間伐材は管理者が売り払いすべきものですが、伐採量が少なくコストが見合わないため、森に堆積している状況です。

毎年12月に実施している間伐WSでは、参加者には一定のルールで間伐材を持ち帰り、薪やクラフト材として利用してもらうことで、森づくりへの参加インセンティブとして間伐材の利用を試行的に実施しています。

○生き物の調査とすみかづくり

活動エリア外の帯広の森になりますが、モニタリングサイト1000哺乳類調査を行なっています。これまで特定外来生物のアライグマやエゾシカの帯広の森への侵入などを確認しました。長期間継続して調査することで、森の変化をとらえていきます。

活動エリアの植物の変化を捉えるため、樹木の成長や、草本類の調査を行なっています。また、活動エリア近くの19条川の生き物調査では場所による違いを把握しました。

モモンガの巣箱は活動初期から設置していますが、最近ではフクロウ用の巣箱を設置して使用も確認することができました。また、フクロウのエサになるエゾヤチネズミのすみかになるように枝で小山を作るなど、いろいろな生き物が住む森づくりを進めています。

○飛行場周辺の里山づくり

高さ制限により20m以上に育ったトドマツがバツサリ切られた後の森の姿はショックではありましたが、これから里山づくりへの期待もありました。伐採後、植生の変化をしらべましたが、最初の5年間



2020年 モニ1000 アライグマ

くらいは優勢種が大きく変化していく状況を見ることができました。

この場所はカラムツの防風林があったのでハリギリ、ナナカマド、ヤマグワ、エゾヤマサクラなどが自然に育っています。これら広葉樹をいかして、高さ制限にかかるころに伐採して、切り株から発生する萌芽を使って育てることを繰り返す里山方式で森づくりすることにしました。伐採後10年経過し順調に育ち、次の伐採をどうするか考える時期になりました。

○掩体壕周りの整備

活動を始めた当初は大きなコンクリート構造物を堆肥場か何かと思っていましたが、第2次世界大戦の頃に戦闘機を格納していた「掩体壕」とわかり、周辺の草刈りや説明看板の設置、間伐材を使って実寸大の戦闘機を地面に描き、わかりやすく展示しています。



○今後の取り組み

高さ制限のある里山エリアはこれから本格的な手入れが始まり、トドマツなどの間伐もまだまだ作業は続きます。また、植生の修復や生き物の住みやすい環境づくりも時間のかかる活動になります。

これらの活動を通じて森づくりの面白さを知ってもらうことや、薪などの間伐材などで新たな関心、人材に活動に参加してもらえるように取り組みたいと思います。

森づくり活動団体 帯広の森サポーターの会

事務局長 緒方 潤

設立年月日	2006年12月4日
代表者 (連絡先)	秋葉 克幸
会員数	67名(2024年8月現在)

設立趣旨

帯広の森サポーターの会(以下、本会)は帯広の森を活動拠点に「植樹・育樹等の森づくりで自然環境保全に寄与すること」を目的として設立された。その後、活動の進展に伴い、「市民が楽しく安全に憩うことが出来る森づくり」、及び「自然豊かな市民の森を後世に残すこと」、を目的に加え活動している。

活動内容

1) 活動エリアと面積

第7ブロック: 約20ha (H11年、H12年、H13年、H16年植樹地)

第8ブロック: 約12ha (H9年、H10年植樹地、その他)
現状の活動エリア合計は、約32ha



2) 森づくりの基本姿勢

市民植樹によって作られた帯広の森は、人手をかけて管理しなければ健全な故郷の森には育たない。そのため私たちは個々の樹木の特性や森林の管理方法を多くの専門家に学びながら、保育作業を行っている。最終的には市民が集い、憩い、利活用できる、故郷の森として開放していきたい。

この実現のためには多くの市民を巻き込むことが重要である。私たちは「森を知り、育て、楽しむ」をモッ

トーに、誰もが興味を持って参加できる活動を目指している。

3) 具体的な活動内容

【日常の活動】

全員が参加する月2回の例会活動と、有志による週2回の活動が基本で、以下の作業を実施。

- 植樹／移植、下草刈り、下枝打ち、ツル切り
- 危険木／支障木の除伐、間伐、外来種の除去
- 散策路整備、看板設置、ベンチ製作等の安全に森を楽しむ為の林内整備



これら日常活動を安全に行うための各種対応。

- 作業前後のミーティング(作業内容の確認、班分け、安全確認、各種報告)
- 通報訓練、刈払機やチェーンソーの取扱い講習の実施等

【市民イベント、会員用講習会等の実施】

森に興味を持つ仲間を増やすため、市民イベントと会員用講習会を積極的に開催。

市民イベント、会員用講習会の実施例

森を知る	植生現地研修会
	優良森林見学会
	スズメバチ、マダニ等の現地研修会
森を育てる	選木と間伐の現地研修会
	チェーンソー、刈払機等の実技研修会
	林内作業安全講習会、救急法の研修会
森を楽しむ	森のめぐみを使った工作体験会
	白樺樹液採取体験会



【活動の成果】

H9年植樹域（約5ha）からスタートした当会の活動は、徐々にそのエリアを拡大し、現在の活動領域（約32ha）まで広がってきた。

下草刈りや下枝打ちにより、安全で見通しの良い森が広がってきた。特にH9年10年植樹域では散策路整備や看板設置等を進め、2023年からは市民開放日を設けて、会員の案内のもと市民にも自由に散策して貰っている。

外来植物を抑制し在来種を増やす森づくりを進めると共に、オオアワダチソウ除去後の草地に植樹する活動も始めている。

2023年から外部講師の指導を仰ぎ、森の植生を継続して記録する取り組みを始めた。今後の森の変遷の基礎資料となることを期待している。

除間伐や枝打ちにより発生した資源を出来るだけ有効活用するため、各種取り組みを行っている。枝葉や木の実なども森の工作体験会で森の魅力を伝えるイベントに活用している。



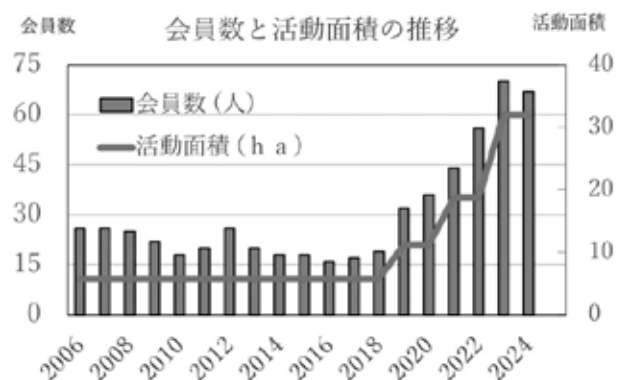
これからの活動について

- 帯広川の西側に位置する当会活動エリアが、帯広の森の一部であることを知らない市民は多い。私たちはこれからも様々な活動を通して多くの人を森に呼び込み、森づくりに興味を持つ仲間を増やしていきたい。
- H9年10年植樹域を主とするエリアは、市民が散策等を通して安全に森に親しむことが出来るエリアとして整備していきたい。
- 森づくり活動に伴って発生する木質資材等の利活用は現時点では限定的であり、今後一層の利活用を進める方法を、関係者と協力して考えていきたい。



【参考資料】

会員数と活動面積の推移



森づくり活動団体 報徳会

事務局 北野 治義

設立年月日	2021 年 1 月 1 日
代 表 者 (連 絡 先)	馬淵 征雄
会 員 数	25 名



設立趣旨

緑化活動等を通して地域社会の発展への協力及び会員相互の親睦を図ることを設立趣旨としている。

このことから、市民の植樹活動の積み重ねで、帯広の街を取り囲む形で森が作られた「帯広の森」を郷土樹種を主体とした自然豊かな森に導くための育成・管理を行い、子や孫に引継ぐことを活動の主目的としている。

活動内容（写真にて紹介）



春一番に活動内容の検討会を行う



樹木が消失した個所への、植栽活動
アオダモ苗の植栽



稚樹を育成したイタヤカエデの植栽



近くに密生するミズナラ幼木の移植



森の下草刈り



密度管理のための軽度な除間伐



不要枝・危険枝の除去



森の環境整備(ごみ拾い等)



不要稚樹の抜き取り

帯広の森のこれからについて

森は、長い年数（何十年、何百年）をかけて変化を続けていくが、その森を持続的に維持管理していかなければならないのは、「帯広の森」も同じと考えている。

ただ、森は自らの力で森の形を作り出すことも出来ますので、除間伐や外来樹種の除去等を急ぎ、早急に森の形を見極めようとしてはならない。

私たちは、森の変化時に少し手を加え成長のお手伝いをする程度で、森を見守っていくことが肝要と考えている。

森づくり活動団体 帯広畜産大学公認
森づくりサークル もりともし

代表 亀井 幹人

設立年月日	2015 年 2 月 16 日
代 表 者 (連 絡 先)	亀井 幹人
会 員 数	25 人

設立趣旨

当サークルは「森で遊び、そのお返しとして森づくりをする」という森と人との関係性を大学生や市民に提案するために設立されました。サークル名の「もりともし」とは「森と持ちつ持たれつ!」というサークルの趣旨を略したものです。



活動内容

森と持ちつ持たれつをモットーに自然に親しむ活動をする。帯広の森では土地を少しお借りして森づくり活動を実行中。

○帯広の森観察会（2024 年 6 月 8 日）

活動地にある動植物の現状を知り、これからの管理に活かすことを目的に観察会を行った。はぐくむの職員の方にガイドをお願いし、活動地付近の植物、虫、野鳥、土地の特徴などを詳しく教えていただいた。湿り気があり、草原も広がる特殊な植生の中でできることを考える必要があることを知る。



○ルピナス駆除（例年 6 月頃）

ルピナスは活動地に生える外来種であるが、カラフルで綺麗な花を咲かす。繁殖力が高く根が太く張るため厄介な種である。スコップで根こそぎ掘り起こし、引き抜いたものは根から繁殖しないよう木にかけておいた。

もりともしでは毎年ルピナス駆除を続けており、今年はいままでの成果もありほとんど姿を見なくなっていた。引き抜いたルピナスの一部は草木染めに利用し大学の学校祭で販売するなどの利用も行った。



○その他外来種駆除（2024 年 6 月 9 日）

観察会で得た知識をもとに、ルピナスのほかに繁殖力の高そうな外来種も取り除いた。活動地一面に広がるオオアワダチソウやフランスギクは通り道や保護したい種の周りのものを刈り取った。活動地の奥の一部分に生えるニセアカシアは、はさみやノコギリを使って幼木を伐採した。



○池の管理（2024年7月7日）

活動地付近にある小さな人工池の植生管理をエゾリスの会の皆様と行った。現地では斜面から流れてくる水が道路によってせき止められることにより水たまりができており、今やカエルやトンボなど水を利用する生物たちが集まるようになっている。しかし、自然に流れ出る水だけでは安定せず、植物が水面近くを覆ってしまうため、刈り取りや泥上げをして池の管理を行った。



帯広の森のこれからについて

今後、もりともが帯広の森で進めていけることは、以下のような活動だと考えた。

- ①ルピナス、オオアワダチソウ、フランスギク、コウリントンポポ、ニセアカシア、チョウセンゴヨウなどの侵略度の高い外来種を駆除する。
- ②アヤメ、コケイラン、ベニバナイチヤクソウ、ナガボノシロワレモコウなど在来重要な植物の周りを重点的に保護する。
- ③活動地に杭を立てて、自分たちのスペースを分かりやすくしたり、区画ごとの植生や虫を調査する。

上記のような管理を続け、帯広の森を郷土の森に近づけることにつなげていくことが目標である。

森づくり活動団体 認定 NPO 法人
子どもと文化のひろば ぶれいおん・とかち

理事長 今村 江穂

設立年月日	2006 年 7 月 7 日
代 表 者 (連絡先)	今村 江穂
会 員 数	正会員 146 世帯 438 名 (2025 年 1 月現在)

設立趣旨

主に十勝の子どもと大人に対して、芸術文化や自然環境を含む生活文化などの生の体験の場づくりを通して、子どもと大人が共に学び合い育ち合えるぬくもりある豊かな地域文化環境をつくることを目指す。



活動内容

「親も子も共に育ち合い、安心できる居場所」「子育ては地域みんなで」を合言葉に、親も子も多世代の多様な人との関わりの中で、五感を刺激するあそびやリアルな体験の場を数多く積み重ねている。全国からプロのアーティストを招く舞台鑑賞やアート表現活動などの「芸術文化体験事業」、森のあそび場づくりやキャンプ、こども参画などの「生活文化体験事業」、未就学の子どもと親の学びとあそびの場《プレイセンター》、帯広ファミリーサポートセンター事業などの「子育て支援事業」、地域や人とのつながりを構築する「地域ネットワークづくり事業」など。

森づくり・森あそび「あしあとの森」活動

人・森・まちが育つプロジェクトとして、帯広の森・はぐくーむとの協働で取り組んでいます。



活動実績

■ 2017.9.22

森のあそび場づくりキックオフイベント

1 フォーラム「森のあそびを考えよう」基調講演／井内 聖氏、話題提供 日月 伸氏
 2 講演会『子どもが「育つ」場づくりとは?』講師 井内 聖氏 (学校法人リズム学園学園長、はやきたこども園園長 現安平町教育長)

■ 2017.11.5

プレイイベント「馬と一緒に森づくり、木こり体験」／51 名

■ 2018.1.27

苫東和みの森「月に一度は森づくり」視察

■ 2018.2.7

苫東なごみの森視察報告会

■ 2018.2.25

プレ企画「森のあそびを考えよう」はぐくーむ主催「みんなでもりをはぐくーむ」への参加／馬と一緒に森づくり、動物のあしあと・生き物さがし／58 名

■ 2018.4.4

帯広の森活動承認申請…昭和 55 年植樹区の一部 (4.5ha)

■ 2018.4.22

第 1 回「あしあとの森」実施／25 名

以降隔月で開催。～10 月第 4 回目まで会員中心に、12 月より市の広報でも周知。

2018 年度

あしあとの森／全 6 回実施／268 名

■ 2019.5.19

森のこどもらんど実施／550 名 以降毎年 5 月開催 (コロナ禍除く)

2019 年度

●あしあとの森／全 5 回実施／186 名

●乳幼児の森のおさんぽ会／@はぐくーむ周辺の森／通年隔週実施／全 19 回／296 名

2020 年度

- あしあとの森／全5回実施／301名
- 乳幼児の森のおさんぽ会／通年隔週実施／全18回／265名
- 研修会
- ①リスクマネジメント講習会／講師：どんころ野外学校 新野和也氏／13名
- ②自然体験活動を楽しむためのコツ／講師：えんりっと 小川真由美氏／18名

2021 年度

- あしあとの森／全6回実施／194名
- 乳幼児の森のおさんぽ会／通年隔週実施／全24回／約200名
- ちいさなあしあとの森
乳幼児期の会員親子を対象に、森に親しむための活動。あしあとの森活動のない月に全3回実施／73名
- 研修会
- ①野外体験活動のための救命救急講習／帯広ライフサポート協会 佐藤悦弘氏／11名

2022 年度

- あしあとの森／全5回実施／222名
乳幼児の森のおさんぽ会／通年隔週実施／全24回／約200名
- 森のこどもらんど／600名
- ちいさなあしあとの森／全5回実施／140名
- 野外活動のための救命救急講習／帯広ライフサポート協会 佐藤悦弘氏／17名

2023 年度

- あしあとの森／全5回実施／157名
- 乳幼児の森のおさんぽ会／通年隔週実施／全21回／320名
- ちいさなあしあとの森／全5回実施／124名
- 森のこどもらんど／300名

【助成金・表彰等】

2018～2024 年度

帯広市緑の募金緑化活動配分金

2019～2022 年度

緑の募金 子どもたちの未来の森づくり助成事業

2022～2023 年度

コープ未来の森づくり基金助成事業

2022 年度

ドコモ市民活動団体助成事業（ちいさなあしあとの森）

2023 年度

- 全国森林レクリエーション協会「地域美しの森づくり活動コンクール」特別奨励賞受賞

2024 年度

- 森と緑の会、北海道他実行委員会「森と人を育てるコンクール」木育活動を行う団体等部門最優秀賞受賞



帯広の森のこれからについて

先人たちが描いた、森に囲まれた緑豊かなまちづくりの構想の下、育まれてきた森の恵みを大切に継承していきたいと思います。

今を生きる子どもたちが、自然の神秘に触れ、五感を刺激されてイキイキと遊びこめる体験がたくさんできること。

子どもも大人も世代を超えて、共に汗を流して、森づくりの楽しさを共有できること。

一人ひとりの願いを持ち寄って、ゆるやかにつながり合えること。

そんな可能性にあふれた森の居場所づくり。

ちいさな森のコミュニティから、ふるさとへの愛着が生まれるように。ゆっくりと時間をかけて、森も人も育ち合っていきます。



森づくり活動団体 帯広の森町内会子ども会 思い出植樹の有志グループ

小宮 忠義

設立年月日	2019年5月27日
代表者 (連絡先)	中島 辰男
会員数	14名及び子ども会会員小学生15名

設立趣旨

平成28(2016)年夏に台風の襲来で被害を受けた森の一区画に於いて、子ども達が十勝地方・帯広の森の姿を体感出来、思い出となるように、天然生木を含む健全な成育の配置を考慮しつつ、適切な樹種を植栽し保育し、身近に親しめる健やかな森を造成していくように活動しています。

『帯広の森』の南東部の一角は、『帯広の森町内会』に接しています。

平成28(2016)年の台風襲来で、ツルに巻き付かれていた樹木が倒されたり、枝が折られたり荒らされた箇所を、藪状に多枝繁茂したヤナギ等も含めて整理し、森の中に育ってきている適種幼木を、移植して育てていく仕事を、平成30年(2018)に始めました。

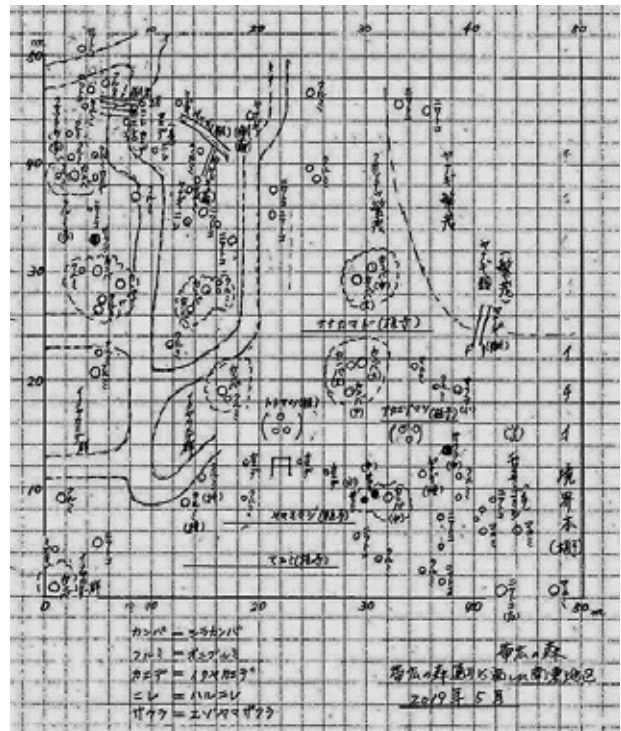
「帯広の森町内会の子ども会」の思い出となる植樹をする有志グループです。この6年間で、トドマツ、ヤマモミジ、マユミ、ナナカマド、エゾヤマザクラ、アカエゾマツ、と進めてきています。



活動エリア



2018年(初年度)秋季植栽



平成30年(2018)活動開始前の被害残存立木と改善移植予定群の位置図



令和5年(2023)秋季の移植群の状況

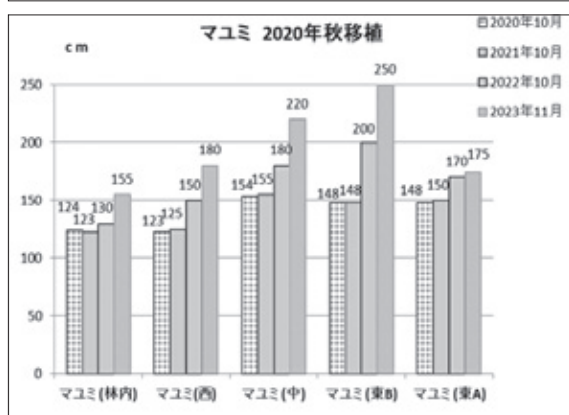
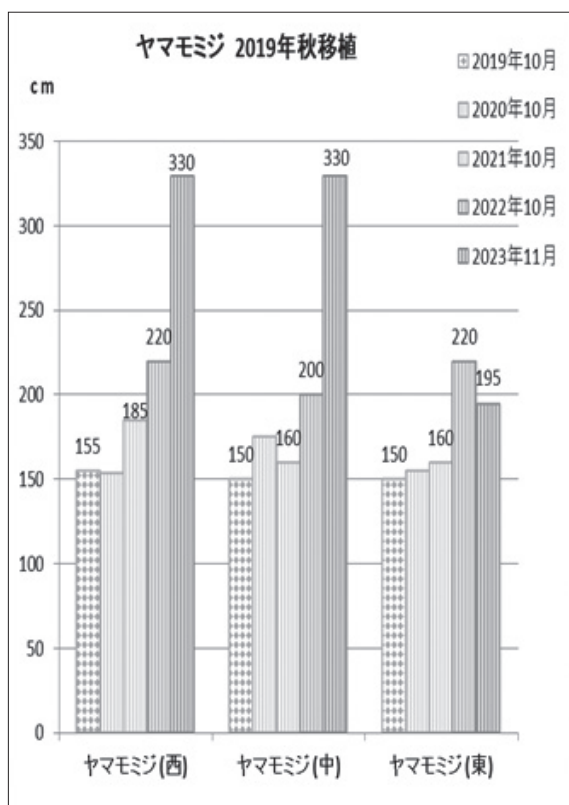
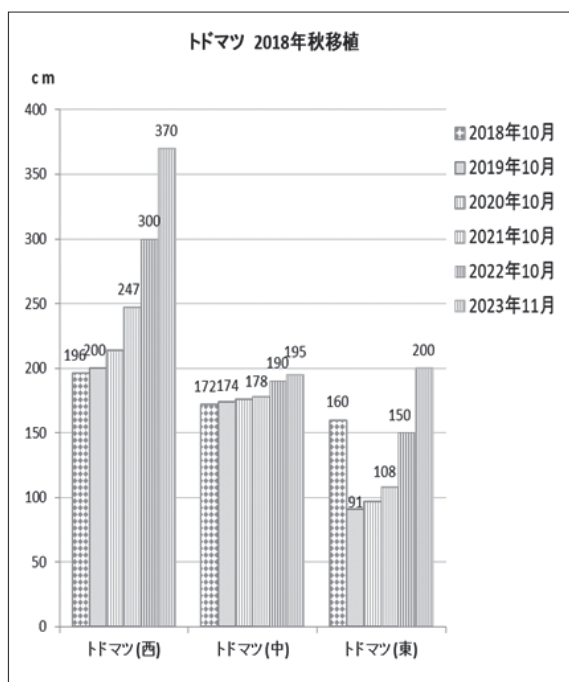


帯広の森町内会子ども会思い出植樹地 正面 ヤマモミジ列の紅葉、手前は、マユミ落葉。標示板の左奥に3本植えの常緑トドマツ。



移植後に株周りを雑草刈り・掘り取りを行い成長し始めていくトドマツ3株、及びヤマモミジ

植木の樹高成長 (cm) 2018年～2023年11月下旬までの状況 (抜粋)



最初に植え（移植）したトドマツは、最近3年間では年50cmも上長成長しています。ヤマモミジとマユミも年40cmも上長成長していますが、これから枝も含めた伸長を止める剪定を始めます。

活動内容

風倒木及び、乱雑に成長繁茂してきた枝やツル、草木類の、整理・伐除、刈取り、掘取りなど行なっています。子ども達が、親子協働で「帯広の森」内の美しく健やかな幼木類を移植し、手当て保育していく活動を通して、自然の中で健やかに育っていく環境を願いつつ。



台風により隣木で倒されたエゾヤマザクラの補修



元気な枝を自力で起き上がらせ快復していく



5月上旬の開花



植栽木根元の積雪を踏み固め、野鼠による食害を防除

第2節 行政・事業者

帯広の森担当部署の変遷と帯広の森基金

帯広市 みどりの課

組織の変遷

帯広の森に関する事務を取り扱っていた部署は次表のとおりで、昭和 45 年に公園緑地課が設けられて以降、4 回の組織再編が行われ、現在に至っている。

【帯広の森担当部署の変遷】

年度	担当部	担当課	課管理職数	係体制	係員数	備考
昭和 45 年	都市建設部	公園緑地課	1 人	公園管理係、公園計画係	6 人	公園緑地課ができる
昭和 46 年			1 人	公園管理係、公園計画係	7 人	
昭和 47 年			1 人	公園管理係、公園計画係	8 人	
昭和 48 年			1 人	維持管理係、庶務係、公園計画係	11 人	
昭和 49 年			2 人	維持管理係、庶務係、帯広の森事業、公園計画係	14 人	
昭和 50 年			2 人	維持管理係、庶務係、帯広の森事業、公園計画係	14 人	
昭和 51 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、用地係、事業係	13 人	
昭和 52 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、用地係、事業係	13 人	
昭和 53 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、用地係、事業係	13 人	
昭和 54 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、用地係、事業係	13 人	
昭和 55 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、事業係	13 人	
昭和 56 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、事業係	13 人	
昭和 57 年			2 人	維持管理係、事業係	13 人	
昭和 58 年			2 人	維持管理係、事業係	13 人	
昭和 59 年			2 人	維持管理係、事業係	13 人	
昭和 60 年			2 人	維持管理係、事業係	13 人	
昭和 61 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
昭和 62 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
昭和 63 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
平成 元年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
平成 2 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
平成 3 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
平成 4 年	緑化環境部	みどりと花の課	1 人	みどりと花の係	2 人	機構改革により「緑化環境部」誕生、「公園課」と「みどりと花の課」に分課する。
		公園課	2 人	管理係、整備係	12 人	
平成 5 年		みどりと花の課	1 人	みどりと花の係	3 人	
		公園課	3 人	管理係、整備係	12 人	
平成 6 年		みどりと花の課	1 人	みどりと花の係	3 人	
		公園課	4 人	管理係、整備係	11 人	
平成 7 年		みどりと花の課	2 人	みどりと花の係	2 人	
		公園課	4 人	管理係、整備係	11 人	
平成 8 年		みどりと花の課	2 人	みどりと花の係	3 人	
		公園課	3 人	管理係、整備係	12 人	
平成 9 年		公園と花の課	3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	17 人	「みどりと花の課」・「公園課」を統合し「公園と花の課」に変更
平成 10 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	16 人	
平成 11 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	16 人	
平成 12 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 13 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 14 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	16 人	
平成 15 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	16 人	
平成 16 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 17 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 18 年			5 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 19 年		都市建設部	3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	「緑化環境部」から「都市建設部」に変更 みどりの課に変更
平成 20 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 21 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 22 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 23 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 24 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 25 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 26 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 27 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 28 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 29 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 30 年	都市環境部	みどりの課	3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
令和 元年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
令和 2 年			2 人	みどりと花の係、公園係	10 人	「都市建設部」から「都市環境部」に変更、環境室設置。
令和 3 年			2 人	みどりと花の係、公園係	10 人	
令和 4 年			2 人	みどりと花の係、公園係	10 人	
令和 5 年			2 人	みどりと花の係、公園係	10 人	
令和 6 年			2 人	みどりと花の係、公園係	11 人	

帯広市帯広の森基金

●目的

帯広市の緑を守り育て緑豊かなうおいのあるまちづくりをめざす帯広の森をはじめとする緑化事業推進の費用に充てるもの。

●設立年月日

昭和 61 年 4 月 1 日

●活用事業（令和 7 年 3 月時点）・

- ・帯広の森の育成及び利活用に要する経費
- ・フラワー通り整備や花壇コンクールなどの花のまちづくり事業
- ・慶事記念樹贈呈事業や緑化重点地区支援などの民有地緑化推進

●基金の財源

- ・寄附（おびひろ応援寄附金）
- ・公園緑地樹木等の剪定や伐採により生じる材の売払い収入
- ・小中学校を含めた市の公共施設で回収した紙パックの売却益

帯広市のこれまでの取組み

指定管理者に業務を一部移行したあとも、帯広市では帯広の森の普及啓発事業等を行っている。以下、その一部を紹介する。

■帯広の森を巡る散策ツアー

〔目 的〕

帯広の森の散策や森づくりの体験等を通じ、これまでの森の歴史、森づくり活動団体等の市民と行政の協働により森の育成や利活用が進められている現状、知られていない帯広の森の魅力等を市民へ周知する。

〔内 容〕

帯広の森各所へバスで移動し、基本的に徒歩でエリア内を散策しながら、各エリアの特徴や育成・利活用の様子、森の歴史、目指す森の姿についてガイドする。また、森づくり活動団体の活動エリアについては、団体メンバーが説明を担当することにより、森づくり活動団体の周知並びに新規メンバー勧誘の機会を提供する。

〔実施期間〕

平成 24 年度～令和 4 年度

※令和 5 年度からは指定管理業務で実施。



令和4年度散策ツアーの様子

■帯広の森展示キャラバン

〔目 的〕

市民が日常的に来訪する公共施設で、帯広の森の概要や歴史、育成管理や利活用等に関する展示を行い、帯広の森に関する市民認知度を深める機会とする。

〔内 容〕

- ・巨大航空写真の展示
各施設やビューポイント等を紹介
- ・帯広の森展示パネル
帯広の森の概要、歴史、活動団体等の紹介
- ・帯広の森今昔比較コーナー
造成前と現在の航空写真を比較する資料
- ・各種パンフレットの配布
はぐくむパンフレット、各活動団体の会報誌やイベントチラシ、ボランティア参加申込書など
- ・アンケート
年齢層、帯広の森に対する興味等を調査

〔実施期間〕

平成 24 年度～

〔展示会場〕

図書館、百年記念館、市庁舎市民ホール、市民活動交流センター、市内小学校及び義務教育学校



令和5年度キャラバンの様子

「帯広の森」の指定管理者として

(株)ケイセイ、帯広の森・はぐくむ
施設長(3代目) 日月 伸

はじめに

2010年に開館し、指定管理制度で運営されている帯広の森・はぐくむは、開館当初の第1期(3年、2010～)、第2期(5年、2013～)及び第3期(5年、2018～)は(株)ケイセイと(株)造景による共同企業体が、第4期(5年、2023～)は(株)ケイセイが単独で指定管理を担ってきた。

開館以来15年にわたり、多少の人員の入れ替わりはありながらも、継続して専任職員を配置して運営にあたってきた。15年を振り返りつつ、運営に込めてきた思いを記したい。

これまでの運営

(1) 第1期(2010～2012年度)

初めての指定管理者として、とにかく運営を軌道に乗せるべく奮闘していた時期である。通常、このような施設は新設時には一定期間、行政が直営で運営し、その後に民間委託されるという例が多いが、はぐくむに関しては開館当初から指定管理制度がとられたので、イベント開催や学校受け入れ、維持管理などあらゆることが全て手探りのスタートであった。



開館当初はインフラ整備も重要な取組
森の活動団体の協力を得て薪小屋づくり

館の管理そのものも初めてであり、初めて迎える冬は、タイマーや自動運転が効かない薪ストーブで、厳冬期に室内を凍結させずに乗り切れるのか不安で、

正月休みも毎日薪ストーブを焚きに来ていたというのは今となっては語り草である。

それでも、はぐくむ秋まつりや森の音楽会など現在も続く、大きなイベントは初年から開催されており、現在につながる土台となったのがこの時期である。

(2) 第2期(2013～2017年度)

土台作りの第1期を経て、第2期は、それを基礎にして、行動していく時期、前に進めていく時期であったといえる(筆者はこの期からの途中乗車である)。

主催行事としては、主催者である私たちがあらかじめ用意したプログラムを提供するようなものから、より市民参加の自由度の高い内容(四季の森めぐり、森の寺子屋など)に移行していった。

学校受け入れについては、第1期のころからつながりをつくってきた学校や教員から徐々に口コミなどで広がり、利用が大幅に伸びていった。当初は小学校が中心であったが、子育て支援センターや児童保育センターなど世代、態様も広がりをみせ、帯広農業高校の森林科学科との連携も始まった。



子育て支援センターとの連携による「もりのこ広場」
(月一開催で2025年中に通算100回を迎える)

森づくりに関わっては、2010年に市が行った(受注者は(株)ズコーシャ)木質バイオマス賦存量調査の調査結果を受ける形で、調査地点を再調査する「定点調査」にも独自事業として取組み始めた。

このころは、運営の「型」が概ね確立されてきた時期といえる。

(3) 第3期(2018～2022年度)

学校利用は、ほぼ受け入れ上限に近い現在の水準

に達し、来館者数の伸びも一旦落ち着いて、量としては一定段階に達してきたことも踏まえ、より質を意識した運営に視点を切り替えていった。このころから「つなぐ」ことを意識した取組へとシフトしていった。ぷれいおんとかちとの連携の取組や、おびひろ市民学で市内全中学校の利用が実現したこと、クロスカントリースキークラブと連携した冬季の歩くスキーレンタルの拡充などは、いずれも他機関、団体等とのつながりが広がり、深まることで進んだ取組である。

期の途中からはコロナ禍に見舞われ、臨時休館や団体受け入れの停止などを余儀なくされ、運営に苦心を強いられる時期もあったが、社会生活が少しずつ動き出してくると、密を避けられる森や公園はむしろ注目を集めた。オープンスペースとして都市近郊に広大な森林が広がっていることの意義を再確認できる機会でもあった。



コロナ禍で野外スポーツとして注目が高まった歩くスキー

期の途中からは、帯広の森全域が指定管理区域として加わり、名実ともに帯広の森の指定管理者となっていた。

(4) 第4期（2023年度～現在）

期の当初から帯広の森全域を指定管理区域として挑む初めての期である。長期的視点のもと、帯広の森全体を視野に置いて管理運営していくことが求められている。

その中で迎えた帯広の森50周年は、はぐく一む（及び帯広の森全域）の運営を担って15年目を迎える私たちのこれまでの成果、課題と今後の指針を再確認するマイルストーンとなる機会でもあった。5月の植樹イベント、9月のシンポジウム、絵本づくりや

記念誌づくりなど、指定管理者として蓄積したノウハウや人のつながりなどが、表現される場であったし、これまでの積み重ねを振り返る機会にもなった。

開館5年目に迎えた40周年からみると、進んだこともあれば、道半ばのこともある。課題が課題のままのものもある。もとより、帯広の森の取組も私たちの使命も、完成して終わりというようなものではなく、すべては続いていくこと、続けていくことこそが本旨である。大きな節目を経て、気持ちを新たに歩みを進めたい。



森の維持管理も大切な業務

森のつなぎ役として

(1) 帯広の森・はぐく一むの役割

こうして、理想を追い求めつつも、段階に応じてアプローチを変えながら取り組んできた。その過程で常に考え続けてきたのは、はぐく一むの役割は何なのか？指定管理者として果たすべき役割は何なのか？ということである。

帯広の森・はぐく一むは、「帯広の森の育成管理・利活用の拠点施設」である。この説明は非常にシンプルでありながら、それをどのように体現していくかはなかなか難しい。なぜならこの文章の中には、育成管理・利活用を進めるために、牽引役となるのか、サポート役となるのか、調整役となるのかなど、どのような「役割」で「何を」していくべきかについては一切書かれておらず、ただ「拠点」すなわち「場」であることが述べられている。

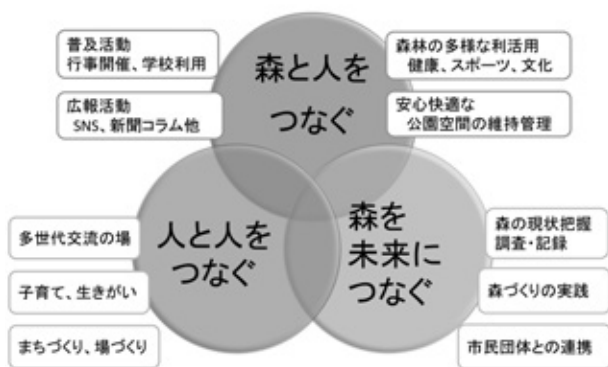
いろいろと考え、行動にも移してきたが、結果として帰着したのは、「拠点」という文字通りの役割である。拠点とは「拠りどころとなる場」のことで、すなわち軸（ハブ）のようなものであろう。

人が集い、つながる場
情報が集まり、発信される場
思いが結集し、活動が始まる場
森の過去と未来の結節点を取りもつ場
など・・・

求められるのは、拠りどころであるその場と機能をしっかり維持・発展させ、保証していくこと。時に船頭役、時に黒子、時にコーディネーターとなりつつ、基本は車輪の軸として、取組（車輪）を前に進めること、円滑に進むように調べていくことにあると考える。

また、ハブの最大の役割は「つなぐこと」にあると考える。指定管理者の重要な使命は、あらゆる物事をつないでいくこと、時代をつないでいくこと、様々なつながりをコーディネートしていくことである。

ここからは、「つなぐ」の中で特に大切と考える、「森と人をつなぐ」「森を未来につなぐ」「人と人をつなぐ」の、3つのつなぐをキーワードに論を進める。



(2) 森と人をつなぐ

はぐくむはいわば帯広の森の玄関口であり、森と人をつなぐのは基本となる役割である。市民と森をつなげるためには、行事の開催やインターネット、新聞など多様な媒体による情報発信など様々な取組がある。行事等については本誌第2章第2節にも詳述しているのでそちらを参照されたい。情報発信については、様々な努力をしているが、「帯広の森＝スポーツ施設」というイメージも根強く、帯広の森を知らない市民もまだまだ多い。これからも地道に継続していく必要があるだろう。多くの方々に伝える

手段としてはSNSなどが有効であるが、一方でダイレクトなコミュニケーションこそが力を持つ場面も多い。古い人間としては後者も愚直に大切にしていきたい。

人とつながるという意味では、ボランティア団体など森に関わる関係者や、外部の団体、専門家とのつながりも重要である。限られたわずかなスタッフのことに限界があり、そういった点では、様々なつながりが帯広の森の力となる。

次世代へつないでいくことも重要である。とりわけ未来を担う地域の子どもたちへの普及、教育には力を入れてきた。開館以来、学校等の受け入れは右肩上がりに増え、現在は繁忙期の受け入れはほぼ飽和に達している。当初こそ学校等へのはたらきかけも行ってきたが、徐々に学校のリピート利用や、利用していただいた先生が異動後に新たな学校で生徒を連れて利用してくれるなどして広がりを見せていった。これは、実際に利用していただいた引率の先生方と丁寧にコミュニケーションを図ったり、教員研修等を積極的に受け入れてきた積み重ねの成果と自負している。



積極的に行ってきた教員研修(幼稚園・保育所、小中学校)

とはいえ、開館10年目までは、体験学習で帯広の森を利用するかどうかは学校の個々の先生方の一存によるところが大きかった。そのため、例えば市内でもすべての子どもたちが森の体験ができるとは限らなかった。そこから大きなステップとなったのが2020年から帯広市で始まった小中学生向けの全校共通のカリキュラム「おびひろ市民学」であった。市教委でその具体的カリキュラムを組み立てる際に、それまで私たちが学校等を積極的に受け入れてきた実績を評価していただき、中学生向けの「SDGsを

学ぼう」のカリキュラムの一環として、帯広の森での半日の学習が組み込まれることになった。このことによって、市内のすべての中学生が最低1回ははぐく一むを訪れ、帯広の森について学ぶ機会がもてることになった。これは私たちが目指していた大きなステップであった。



おびひろ市民学 はぐく一むでの学習の風景
念願だった市内の全ての子どもの受け入れが実現

子どもたちへの普及、教育については、未来への種まきという思いで取り組んできたものの、それがどのような芽生えにつながるのかは、なかなか具体的には想像はできずにいたが、ここ数年の間に、少しずつその萌芽がみられ始めている。例えば、かつて学校の授業で訪れた中学生が、その後学校の先生となって子どもたちを連れてきてくれたり、学校の体験学習やイベントで森の体験をしてくれた子が公園管理の仕事に関心を持って就職してくれたり、ささやかではあるが大きな果実が確実に見られ始めている。今後、はぐく一むで森の体験をしたことのある子どもたちが続々と成人して社会に出ていく。彼らの原体験の中に帯広の森の何かを残すことができているだろうか？近い将来、大人になった彼らが帯広の森に来て何を語ってくれるだろうか。今から楽しみにしたい。



世代間交流は体験の意義をより高める

森を未来につなぐ

人との関わりも重要であるが、それもしっかりとした森あつてのことである。豊かな森を育て、引き継いでいくことは取組の基盤となる重要な使命である。

指定管理当初の11年間は、管理区域ははぐく一む及びその周辺の一部区域に限られ、全体の森づくりへの直接的な関与は限定的であった。そのような立場で、森づくりの拠点たるはぐく一むを預かる私たちにできることは何か？ここで、私たちが取り組んだことの 하나가、森の現状を記録していくことであった。幸い2010年に市が取り組んだ「帯広の森木質バイオマス賦存量調査」において、帯広の森の全域にわたる100箇所以上の地点の調査がなされていた。こういった調査は、一度の調査ではその時点の森の状態がわかるのみだが、繰り返し同じ調査を行うことで、森の成長、変化を追うことができ、記録の価値が格段に上がる。そこで、同じ箇所、同じ内容での再調査を行うことにした。その成果の一部は本誌第1章第3節に記載のとおりである。他の業務と調整しながら、調査を実行することは容易ではなかったが、8年かけて再調査可能な100箇所の2回目の調査を終えることができた。今後、3回目の調査についても、私たちの体力の許す範囲で取り組んでいきたい。



地道に行ってきた森の定点調査

そして、帯広の森全域の指定管理者となった今は、全体の森づくりの実践者としての役割も担うこととなった。森の現状を見通す洞察力、10年、20年後、さらに50年後の将来を見据えた想像力、今何をなすべきかなさざるべきかを見極める判断力、それを実践に移す実行力。「技術者」として多くが求められる。そしてさらに、それを市民とともに進めていくのが帯広の森である。そのコーディネーターなども含め、ハー

ドルは決して低くはない。何とか力を尽くしたい。

学校や団体の体験利用についても、それぞれ個別の体験はその日限定の活動であることが多いが、それをつないでいくことができれば、森づくりの大きな原動力となる。例えば、チョウセンゴヨウの抜き取りは、小学生でも大人でも、できる作業量に劇的な違いはない。この作業に関しては、一人のスーパー林業マンよりも 100 人の小学生の力の方が大きい。このような場面をうまく設定していくことができれば、子どもたちも立派な森づくりの担い手になりうる。もちろん、大木の伐採のように、一人のスーパー林業マンが力を発揮する場面もある。適材適所で、多くの市民が役割を発揮できる場所をコーディネートしていくのも指定管理者の役割の一つである（日月 2024）。



チョウセンゴヨウの抜き取り・伐採／子どもの力は絶大

人と人をつなぐ

帯広の森は、壮大なまちづくりの取組である。その意味で、帯広の森自体がまちづくりの中で重要な場として機能していくことも大切な役割であろう。すなわち帯広の森が様々なまちづくり活動の場となり、人と人がつながる場となることである。

人と人のつながりを考える時、十勝・帯広のような地方都市の良さの一つは、人の距離感のほどよい近さだと感じる。初対面の人に実は共通の知人がいた、というのは誰しもによくある体験であろう。一人に 500 人の知り合いがいるとすれば、おおざっぱにいうと知り合いの知り合いは $500 \times 500 = 25$ 万人（重複もあるので単純にそうはならないが）。つまり、知人の知人まで広げると、十勝・帯広のほとんどの人とつながっている可能性があるということである。

帯広の森がそんなつながりを発見でき、深められる場の一つになるとしたら、それも一つの森の価値であろう。

帯広の森が、余暇の場であり、子育ての場であり、教育の場であり、文化の場であり、生きがいの場であり、健康増進の場であり、それらを通じた交流の場であり……。いわば森のコミュニティーセンターであれたらいいのかもしれない。

また、帯広の森が市民生活の中に、必ずしもそれ単独に存在するものではないことも認識しておく必要がある。帯広の森には、市民ボランティアとしてまさに生活の中心になるぐらい深い関わりを持つ方もいらっしゃる一方で、多くの方々にとっては、森はくらしの様々な側面のうちの一部分であろう。例えばたまに散歩にくる場として、通学路として利用する方もいる。年に一度何かの用事で訪れる方もいるだろう。いずれかがよい悪いではなく、ささやかでも多くの様々な市民の日常、非日常の中に存在することがまちづくりの中では重要なことである。森の魅力の一つは、例え主役でなくても、脇役にも、時に舞台にも、背景にでもなれる懐の深さである。ある人には日常の背景として、ある人には心のよりどころとして…多くの人のくらし、心に帯広の森があり続けられたらいい。もちろん、主役にもなれるのが森である。指定管理者として、その舞台はしっかりつくっていききたい。

そういった観点からも、帯広の森が、自然や森に限らない様々な機関・団体などとなつがっていくことは重要である。これまでも市民団体や、緑ヶ丘公園など他の公園施設、学校、動物園などの公的機関、商業施設、音楽団体、スポーツ団体など様々なセクターとの連携を進めてきた。今後もつながりを強め、深めていきたい。その際、一見組織同士のつながりのように見えるものも、その結節点の多くは人と人のつながりであり、そこには人と人との対話がある。このことも肝に銘じておきたい。

おわりに

帯広の森もはぐくむも、地域の重要なインフラ（＝社会的共通資本）である。それは自然資本としてのグリーンインフラであり、くらしやまちづくりの場としてのソフトのインフラでもある。多くの市民にとって、帯広の森がかけがえのない存在であること、そして未来の市民にとってもそうであり続ける

こと。このことこそが帯広の森を未来につないでいくための基盤となる。そのための森づくり、しくみづくり、つながりづくり……。帯広の森のハブとして引き続き追及していきたい。

中学生向けおびひろ市民学の授業では、SDGsの根幹である「持続可能」の実践例として帯広の森を紹介している。授業の最後には、帯広の森がここまでの50年間続けてこられた理由は何だろう？と問いかける。答えはいくつもあるだろうが、その一つは、50年間あるいはその前から、その時々で関わる人々が意志をもってつないできたからであろう。時々の意志と選択の積み重ねをなくして50年という時間はなしえなかっただろうし、それは今後についても同じであろう。

帯広の森やはぐくむの指定管理者として、これまでの取組やそこに込めてきた思いなどをまとめてみた。私たちなりに精一杯取り組んできた15年ではあるが、もちろん至らない部分は多々あるし、課題は山積である。それらも含め、帯広の森がより良き森として、市民にとってより良き場としてあり続けられるよう、そして未来につないでいけるよう、引き続き、関係者・市民の皆さんと手を取り合い、時に叱咤激励をいただきながら取り組んでいきたい。

引用 _____
日月伸（2024） 自然とともに生きる森林教育学，
pp.167-173, 海青社



帯広の森運動施設区 指定管理者

一般財団法人 帯広市文化スポーツ振興財団
専務理事 原 孝則

はじめに

「帯広の森」と聞いて、あなたは何を一番に思い浮かべますか？

多くの木が茂った豊かな森、散策や通学で歩いた園路、子供の頃、親と一緒に重たいスコップを持って苗木を植えに行ったことなど、色んな思い出があると思います。

そんな中でも、帯広の森に集積された運動施設を一番に思い浮かべる人も多いと思います。

広い帯広の森の中であって、所謂、「森」とは違った場所、野球場や陸上競技場、市民プール、屋内スピードスケートリンクなど、多くの運動施設が集まっている場所、それが「帯広の森運動施設区」です。

運動施設区とは

運動施設区は、8ブロックに分類されている帯広の森の中では、第4ブロックに位置づけられ、「スポーツの森」とも称されています。

運動施設区は、帯広の森の当初都市計画決定区域（昭和49年2月）には含まれず、昭和52年10月の都市計画決定変更で追加編入されました。

その面積は、約80haで帯広の森全体の20%近くにも及ぶ一団のエリアです。

運動施設区には、通年、夏期・冬期営業を行う多くの屋内外施設が設置され、様々な競技種目に対応し、地域のスポーツ振興、国内外の大会や合宿、スポーツを通じたコミュニティ形成、学校教育との連携、さらには健康的なライフスタイルの普及など、様々な分野に大きな役割を果たしてきました。

運動施設区において、最初に整備された施設は、昭和58年度に供用開始した「帯広の森陸上競技場」です。以降、平成21年度に供用開始した「明治北海道十勝オーバル（帯広の森屋内スピードスケート場）」まで、全12施設（パークゴルフ場及び廃止された施設を除く）が整備されました。

令和5年度末時点で記録に残っている利用者数は、ピーク時には年間80万人を超え、その累計は、約2,200万人に達しています。

その利用者数からも、運動施設区が多くの人に親しまれ、利用されてきたことを窺い知ることができます。

計画等における位置づけ

運動施設区は、帯広の森の計画段階では、どのように位置づけられてきたのでしょうか？

当時のプランや計画に記載されている内容（一部抜粋）を以下に示します。（表記は原文どおり）

●帯広の森と街を創るグリーンプラン（S45.9）

街を抜けると森がある。

どの道を行っても、その前に十勝特有の大樹林が大きく我々を迎え入れる。そして、その森の中には、花壇、子供の遊び場、体育運動場、記念植樹、果樹園、彫刻の森等の施設が程よく配置され・・・。

●第二期帯広市総合計画（S46～S55）

昭和46年に策定された第二期帯広市総合計画において、「帯広の森」はまちづくりの主要施策として決定されました。

運動施設区については、「帯広の森」建設構想の推進の中で次のように記載されています。

「帯広の森の建設用地については、それぞれ特色ある樹木を植栽した森林区、（中略）、あるいは風致公園区、運動公園区などにわけ、市民がこの森を愛し、楽しみ、利用することができるよう造成を進める。」

●帯広の森造成計画（牧野案）（S50.3）

この計画は、森づくりの専門家による最初の造成計画で、その後の森づくりの礎となったとされています。

Ⅳの施設造成計画で、どんな施設をつくるか検討され、その中に「軽運動施設」、「グラウンド・球技場」などが示されていますが、グラウンドについては、次のように記されています。

「グラウンドは正式競技場としての設備がのぞましい。」

以上の3つの計画は、森づくりの基本となるものであり、そのいずれにおいても、帯広の森の計画段階から「運動施設」を設置することが織り込まれていたことが分かります。

運動施設区についての考察 ①

帯広の森には、多くの運動施設が設置されてきましたが、帯広市における当時の状況などを振り返ります。

「帯広の森と街を創るグリーンプラン」が策定されたのは、昭和45年。

「第二期帯広市総合計画」の計画期間は、昭和46年から昭和55年です。

帯広の森の運動施設は、昭和57年から平成21年

にかけて整備されました。

その時代を念頭に、運動施設の必要性を考える上で参考となるであろう「日本経済」、「帯広市の人口」、「小中学校の新設状況」、さらに公共施設の整備状況例として、住民に身近な「コミセン及び福祉センター等の設置時期」を確認し、帯広の森に運動施設が集約され、整備されてきた理由等を改めて考えます。

1. 日本経済

「もはや戦後ではない」と政府の経済白書が宣言したのが昭和31年で、昭和47年までが高度成長期とされています。

昭和48年から昭和49年にかけて、第一次オイルショックがありました。

バブルと言われたのが、昭和61年12月から平成3年2月でした。

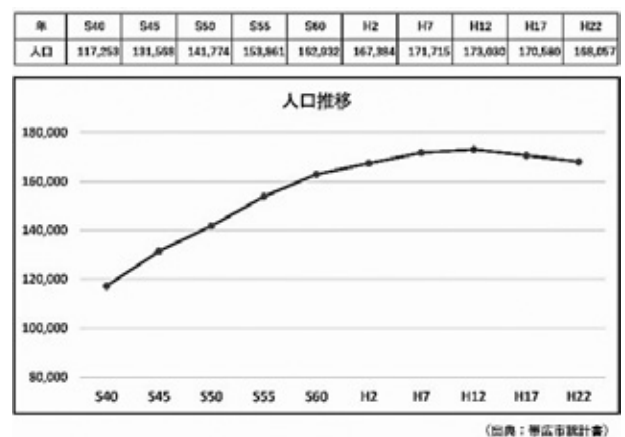
バブル崩壊以降、失われた30年と称されデフレ状態が長く続きましたが、その間にも、第14循環（いざなぎ景気）と言われる好景気が、平成14年から平成20年にかけて続くなど、日本経済は、世界情勢の影響を受ける中、大きな変動を続けてきました。

2. 帯広市の人口推移

帯広市の人口は、市制施行時（昭和8年4月）に32,506人でした。その後、毎年、数千人単位で増加が続き、昭和32年4月の川西村・大正村合併で9万3千人余りとなり、2年後の昭和33年には、10万人を超えています。

以降も産業の発展や十勝の中心自治体としての機能強化など、順調に増加しましたが、日本全体の人口構造には逆らえず、平成11年の約17万5千人をピークに減少し、現在に至っています。

今回の考察に必要な期間の人口推移を下図に示します。



人口と大きく関係する住宅地については、昭和42年に着手した「大空団地」造成をはじめ、昭和45年の市街化区域決定以降は、民間による個人、組合施行の区画整理や開発行為が盛んに行われ、現在までに1,000ha以上が開発されています。

一例として、昭和50年代の終わりから昭和60年代にかけて、帯広市西部で施行された区画整理事業（組合）は、帯広市最大規模で約184haの開発面積でした。

3. 小中学校の新設状況

現在、帯広市には、小学校が25校、中学校が13校、そして義務教育学校が1校ありますが、帯広の森の整備が始まったころの状況を基に各学校が開校された時期をグループ化し、数値を示します。

なお、現在までに中学校が2校統合され1校になったほか、小学校1校と中学校1校が廃校となり、新たに義務教育学校となっていることから、統合等以前の数値としました。

小中学校は、将来の児童生徒数、住宅の分布や住宅地の開発状況などを踏まえて、新設されていくと考えられますが、開校時期を見ると人口の伸びとの関係が分かります。

小中学校の開校時期

開校時期	校数	比率	校数	比率	計	比率
昭和39年まで	10	38.5	6	42.9	16	40.0
昭和40年から昭和49年	7	26.9	4	28.6	11	27.5
昭和50年から昭和59年	5	19.2	2	14.3	7	17.5
昭和60年以降	4	15.4	2	14.3	6	15.0
計	26		14		40	

4. コミュニティ施設

帯広市では、地域住民のコミュニティ形成の場として、市内全域にコミュニティ施設（コミュニティセンター、地域福祉センター）を設置しています。

コミセンには、軽運動場も整備され、ミニバレーや卓球など、様々なスポーツにも利用されています。

昭和50年代に半分以上が開設されていますが、昭和60年代の早い段階を含めると6割を超える状況で、集中的に整備されたことが分かります。

コミセン・福祉センター等設置時期（農村部を除く）

開設時期	コミセン	福祉センター	計	比率
昭和39年まで	0	0	0	0.0
昭和40年から昭和49年	0	2	2	4.9
昭和50年から昭和59年	7	16	23	56.1
昭和60年以降	3	13	16	39.0
計	10	31	41	

※上記1～4からの推論

地方自治体による公共施設整備は、地域住民へのサービス提供の一環として行われますが、財政的な制約などから必要なサービスの全てに対応できる訳ではなく、重要性などから優先度が判断されるものと考えられます。

帯広の森の運動施設は、昭和58年から平成21年度に整備されました。整備年次を見ると昭和58年から平成2年までに6施設、平成8年から14年に5施設、平成21年度に1施設で、整備費用は、合計で150億円（現存する施設の初期建設費用集計）を超えています。また、開設から相当年数を経過していることから大規模改修や日常的な修繕、さらには毎年の維持管理、運営費用などを含めると莫大な費用が投じられてきました。

昭和40年代以降は、高度成長期、オイルショックもありましたが、バブル崩壊まで経済成長が続いていました。帯広市の人口も急激に増加した時期で、住民生活に必要なインフラ（例：下水道）の整備も急速に進んだ時期です。

生活基盤が整ったことで、生活スタイルも徐々に変化し、芸術文化、レクリエーションなど様々なことへの関心も高まる中、小中学校をはじめ、コミュニティ施設やスポーツ施設等へのニーズも高まったと推測されます。

公共施設の整備には、自治体首長の考えも大きく影響します。時の帯広市長もこの時期に学校やコミュニティ施設、生活インフラなど公共施設を積極的に整備しました。因みに、とちか帯広空港の開港も昭和56年3月でした。

日本全体でも、国の制度も活用し、公共施設整備が盛んに行われた時期でした。

帯広の森に運動施設が整備された背景には、当然、その必要性を前提として、日本経済、人口、児童生徒数、住民意識の多様化など、様々な要素が関係する中、必然性が高かったものと考えられます。

運動施設区についての考察 ②

ここでは、帯広の森に運動施設が集約された理由について改めて考えます。

前述したとおり、経済成長によって、十勝の中心市である帯広市の役割も大きく変化してきました。産業面においては二次産業、三次産業における役割への期待も高まったと考えられます。

また、人口増加による新たな住宅地の開発、小中学校やコミュニティ施設の整備などにより、緑のオープンスペースが減少していった中、余暇の増大や多様なニーズとして、屋外レクリエーション、スポーツへの需要は量的、質的にも高まったと考えられます。

帯広の森運動施設区整備以前の帯広市には、緑ヶ丘公園に一部の運動施設が設置されていましたが、人口増加等による利用者増により需要に対応できない状態になっていました。

そのような状況も踏まえる中、帯広市の将来から見て、運動施設の拡充により市民が広くスポーツを楽しむ環境、記録を求め選手強化できる環境などの必要性が論じられたと考えられます。

また、既存施設の老朽化、大会等における駐車場問題、さらには十勝全体での大規模大会の開催などのため、広大な面積を持つ一団のエリアの必要性が高まり、帯広の森構想の当初段階から「運動施設区」の整備が盛り込まれたものと考えられます。

〈参考〉帯広の森運動施設整備以前の主な運動施設（緑ヶ丘公園）

- ・陸上競技場、野球場、テニスコート、和弓場、洋弓場、市民リンク
- （十勝川水系河川緑地）
- ・野球場、トラック、サッカー場

運動施設整備の状況

ここでは、帯広の森運動施設区に設置されている主な施設を紹介します。（整備年次順）

帯広の森陸上競技場



開場：昭和 58 年 4 月（平成 6 年度全天候改修）（競技場）

- ・日本陸上競技連盟第 2 種公認 1 周 400m

- ・ 8 レーン（全天候型ウレタントラック）、フィールド（サッカー・ラグビー競技可能）
- ・ 補助競技場 250m 6 レーン クレー舗装



・陸上競技場は、全道、全十勝規模の大会が開催されるほか、部活動や走り方教室など多様な利用がされています。2023 年夏の全国高等学校総合体育大会（インターハイ）では、アーチェリー会場としても活用されました。



帯広の森体育館



開館：昭和 60 年 10 月

- ・ 1 階～第一体育館、幼児プレイ室、シャワー室、会議室、指導員室ほか
- ・ 2 階～第二体育館、第三体育館、走路
- ・ バスケット、バレーボールなどコートを使用する競技のほか、武道、卓球、エクササイズ、ヨガなどにも利用されています。



帯広の森アイスアリーナ



開館：昭和 62 年 8 月

- ・リンク～公認リンク
- ・1 階～ラウンジ、選手控室、研修室、レフェリー室
ほか、2 階～観覧席、ホワイエほか



帯広の森第二アイスアリーナ



開館：昭和 62 年 12 月

- ・公認リンク、選手控室、レフェリー室ほか
- ・アイスアリーナでは、世界大会など各種大会のほか、スケート教室、オリンピックメダリストによるアイスショー。第二アリーナでは、タイヤメーカーのテストなど、スケート以外の利用もあります。



帯広の森研修センター



開館：平成元年 1 月

- ・宿泊室、研修室、トレーニング室、レストランほか
- ・研修センターは、宿泊、レストラン等を備えており、毎年、野球、スケート、バスケットなどの合宿に使用されているほか、レストランは、運動施設利用者以外の利用も多く、安くて美味しい食事を提供しています。



帯広の森野球場



開場：平成2年6月

・グラウンド：両翼 97.60m、センター 122.00m

・諸室

ダックアウト、グラウンドキーパー室、選手控室、医務室、役員室、会議室、シャワー室、ホール、コンコース等

・収容人員 23,008 人（内野 8,008 人・外野 15,000 人、身体障害者用 36 人）



・野球場は、高校野球十勝地区大会をはじめ、プロ野球公式戦、野球合宿などに利用されています。



帯広の森市民プール：スインピア



開館：平成8年9月

・50m 競泳用 8 コース（日本水泳連盟公認）

・25m 競泳用 18 コース

・児童用、幼児用プール

・走路等



・市民プールは、各種大会、教室、水中ウォーキングなどのほか、小学校の体育の授業でも使用されています。



帯広の森弓道場・アーチェリー場



開場：平成9年9月

- ・弓道場～近的、遠的、室内近的ほか
- ・アーチェリー場～屋外短距離固定的、屋外長距離固定的ほか
- ・弓道場・アーチェリー場は、各種大会、練習など幅広い層に利用されています。



帯広の森テニスコート



開場：平成12年4月

- ・コート～砂入人工芝生20面（うち夜間照明設備付10面）
- ・クラブハウス（2階建て）～事務室、ロビー、ロッカー室、シャワー室、会議室等
- ・テニスコートは、各種大会、教室、部活動や同好会などで使用されています。



帯広の森スポーツセンター



開場：平成13年10月

- ・冬期：アイスリンク（公認60m×30m）



- ・夏期：軽運動場（卓球、バドミントン、インラインホッケー、フットサル、バウンドテニス等）
- ・スポーツセンターは、夏季・冬季で利用形態が異なり、アイスホッケー、フィギュアなど、大会や教室等で利用されています。



帯広の森球技場



開場：平成 14 年 7 月

・コート～30,240㎡（180m × 168m）サッカー、ラグビー公式戦対応



・球技場は、サッカー、ラグビーに使用されています。全道、十勝規模の大会のほか、日本クラブユース選手権 U-15 大会にも活用されました。

明治北海道十勝オーバル：

帯広の森屋内スピードスケート場

開場：平成 21 年 9 月

・400m リンク標準ダブルトラック、中地多目的広場（4,130㎡）、ランニング走路 470m、トレーニング室ほか

・屋内スピードスケート場は、ISU ワールドカップ スピードスケート大会や全日本クラスの大会も多く

開催されています。また、中地は、テニスや各種教室などにも利用されています。



その他の施設等

・帯広の森運動公園パークゴルフ場

A コース（9 ホール）

B コース（9 ホール）



- ・帯広の森ミニスキー場（特設）
球技場東側に冬期間開設
- ・帯広の森運動公園雪中パークゴルフ場
研修センター南側に冬期間開設

運動施設区の役割等

帯広の森に運動施設が整備されてきた時代的背景、社会的背景、さらに整備された施設を整理してきましたが、ここでは、運動施設区が果たしてきた役割、また地域への影響（貢献）等について考えます。

帯広の森に最初の運動施設が開設されてから40年余り、この間、多くの施設が設置されてきましたが、帯広の森のように、多種目、宿泊など多様な用途に供され、約3,500台の駐車能力を有する施設が一つのエリアに整備されている例は、国内でも珍しく、特徴的なことで、競技者等からも高い評価を受けています。

この環境の良さから、サッカー、バスケットボール、野球、スピードスケート、アイスホッケーなど、プロ、アマチュアを問わず、多くの大会や合宿地として、選ばれています。

スポーツの大会には、選手をはじめ、関係者、観客など多くの人が集まります。大会期間を通じて、延1万人近くが関わる大会もあり、宿泊、飲食、交通など、地域への経済波及効果は計り知れません。また、大会が毎年開催されることにより、十勝・帯広の知名度アップ・発信力向上にも大きく貢献しています。

国際大会や全日本の大会が開催されることにより、高い技術に身近で触れることができ、競技者を目指す子供たちなどへ大きな刺激となります。2023年に開催されたスピードスケートワールドカップには、多くの観客が来場し、世界トップの滑りを目の当たりにしました。

競技者にとって練習環境が整っていることは、非常に重要なことで、帯広の森で練習に励んだ選手が世界で活躍し、オリンピックへの出場、さらには金メダリストも誕生しています。

例を挙げると、スピードスケートの清水宏保さん、高木菜那さん、高木美帆さん、堀川桃香さん、陸上の福島千里さん、パラ水泳の小野智華子さん、他にも多くの選手が帯広の森で練習し、世界に羽ばたいています。

帯広の森の運動施設は、競技者だけのものではあ

りません。市民が気軽にスポーツを楽しみ、身体を動かす機会を提供する場となっています。

個人で水泳を楽しむ人、グループでテニスをする人、トレーニング室に毎日のように通う人、親子でスケートに来る人など、様々な利用があります。さらに、各施設で開催されているヨガ、エクササイズ、スケート、水泳などの教室には、平成5年度で約2万6千人の参加がありました。

帯広市は、昭和63年10月に「健康スポーツ都市宣言」を行い、スポーツを楽しみ、健康な生活を送ることをまちづくりの柱の一つに据えています。帯広の森の運動施設は、その役割を担う中心的な存在になっています。

帯広市文化スポーツ振興財団

帯広の森運動施設区を説明するときに切り離せないのが、昭和59年7月に設立した「一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団（以下「財団」と言う。）」です。帯広市の指定管理者として、帯広の森の運動施設をはじめ、帯広市が設置する野球場やテニスコート、さらに、帯広市民文化ホール等の管理運営を行っています。

財団の定款で定める目的は、「生涯学習における文化・スポーツの振興普及並びに市民や団体の主体的な活動の後援をするため必要な事業を行うとともに、行政機関の設置する施設の管理運営事業のほか、スポーツ施設の設置と維持管理に関する事業を行い、市民の文化と体力の向上、社会参加や定住・交流の拡充をもって文化・スポーツの振興並びに地域社会の活性化に寄与することを目的とする。」とされています。

財団は、この目的に沿い、帯広の森の各運動施設を適切に管理し、利用者に安全な環境を提供するとともに、市民の健康増進や体力向上、各種スポーツ事業の実施などにより、交流人口の拡大など、様々な取り組みを行っています。

財団が主催する大会（一部掲載）として、少年野球、少年サッカー、ママさんバレー、ちびっこアイスホッケー、パークゴルフ、パラ水泳、卓球、スピードスケート競技会などがありますが、その歴史は古く、少年野球は昭和61年から開催されています。日頃の練習の成果を発揮する場として、財団主催の大会が目標とされていることも多く、地域のスポーツ振興に大きく貢献しています。

他にも、プロ野球公式戦、オリンピックメダリストによるアイスショー、国際スปีースケート大会など、様々な競技に関わっており、プロやトップアスリートが満足できる環境づくりに努めています。(例～屋内スピードスケートリンクでは、好タイムが期待できる製氷、プロ野球水準のグラウンド整備など) このように施設を高い水準で維持することが、国際大会などの誘致を可能にすると考えています。

帯広の森の運動施設は、財団が培ってきた技術等によってその機能を最大限に発揮できると言っても過言ではないと思います。

また、日本と韓国の高校アイスホッケー、バスケットボール交流事業、高校野球で使用し傷んだボールを障がい者の手で再生し、高校球児に活用してもらう「インクルージョンボール地域貢献事業」、まちなか歩行者天国への参加、帯広畜産大学、帯広大谷短期大学との連携協定に基づく事業実施など、青少年育成、社会貢献などにも取り組んでいます。

財団は、指定管理者としての責任を全うするとともに、地域のスポーツ振興や健康増進、地域活性化などの取り組みも期待される存在となっています。

昭和 59 年 5 月、第 6 代帯広市長田本憲吾氏（当時）を代表として、財団設立発起人会が設立されました。ここにその設立趣意書（一部割愛）を紹介します。

改めて当時の思いに触れ、帯広の森運動施設区と共にある財団の性格を確認し、今後の活躍を期待するものです。

「近年、市民の生活水準の向上と余暇の増大に伴い、市民の心身の健康づくりとして、文化・スポーツに対する考え方が著しく高まっており、健康で心豊かな市民生活の育成と健全な地域社会の建設のためにも、文化・スポーツ施設は欠かせないコミュニティの場として、日々気軽に余暇時間を十分活用しうる体制づくりが必要である。このことから、スポーツの生活化を促進するとともに、(中略) これら状況の中で、日常活動に結びついた文化・スポーツの一層の普及振興を図るには、施設の合理的、効率的な管理運営とともに、真に市民が要望する各種文化・スポーツ事業を市民自らの手で行うことが、最も望ましいと考えるところである。本趣旨から、帯広市が 3,000 万円の寄附行為をもって、財団法人帯広市文化スポーツ振興財団を設立し、帯広市における文化・

スポーツの普及振興のために必要な事業を行うとともに、帯広市の設置する文化・スポーツ施設の管理運営に関する事業を行い、もって本道における文化・スポーツの振興に寄与しようとするものである。」

むすびに

過日、帯広市が 2024 年に実施した「帯広の森に関するアンケート」についての報道があり、改めて「帯広の森運動施設区」の認知度の高さを確認することができました。

運動施設区自体は、森林区のような森とは、趣を異にしますが、緑に囲まれ、十勝らしさを感じることができるのは、やはり帯広の森の中に存在しているからだと思います。

私自身、市職員時代に帯広の森に仕事として深く関わり、帯広の森の構想に触れ、また、帯広の森に関わる多くの人との出会いの中から帯広の森の奥深さ、さらには 100 年後の姿に思いを馳せ、ぞくぞくした感覚を今でも覚えています。

現在は、運動施設区の管理運営に関わり、施設を利用する人々、特に合宿などで利用する本州の大学生や社会人などから話を聞く機会が多いですが、施設群の充実はもとより、「帯広の森」という言葉の響き、緑豊かな周辺環境の良さに言及される方が多く、嬉しく思っています。

そのような話を聞く度に、運動施設区は時間をかけながら帯広の森の中に溶け込んで来たのだと感じています。

各施設は、建設から時間が経過し、老朽化も進んでいます。この難しい問題への対処は、避けて通れないことで、様々な検討から今後の方向性が決まっていけるのだと思います。

施設を所有する帯広市、利用者、関係者などの知恵でより良い運動施設区になっていくことを切に願っています。同時に「帯広の森」の中にあることが、最大のメリットとなる運動施設区として、さらに多くの人に活用され、発展していくことを期待しています。

